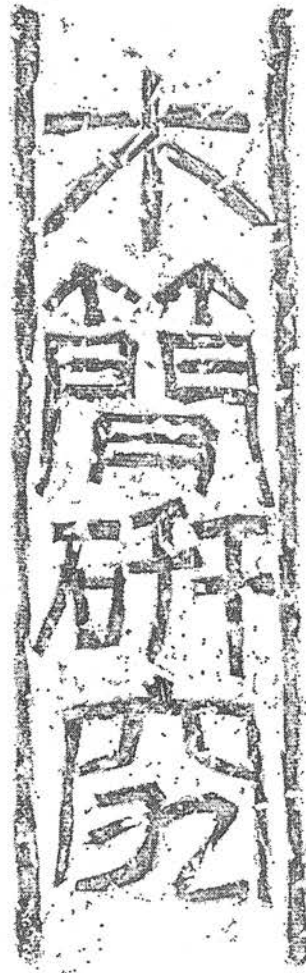


木簡研究

第一二號

木簡研究

第一二號



木
簡
学
会

題字
藤枝
晃
刻

目次

巻頭言……………田中琢……………i

一九八九年出土の木簡……………1

概要……………館野和己……………1

凡例……………

奈良・平城京跡……………渡辺晃宏……………7

奈良・平城京左京二条四坊十一坪……………西崎卓也……………25

奈良・薬師寺……………森公章……………26

奈良・西大寺……………森公章……………27

奈良・藤原宮跡……………橋本義則……………29

奈良・藤原京跡……………橋本義則……………30

奈良・山田寺跡……………橋本義則……………31

奈良・上之宮遺跡……………清水眞一……………33

奈良・飛鳥京跡……………龜田博和田萃……………35

京都・長岡京跡(1)……………

山下多美樹・秋山浩三……………

山中章・清水みき……………38

京都・長岡京跡(2)……………土橋誠……………41

京都・長岡京跡(3)……………百瀬正恒……………50

京都・平安京左京三条三坊十六町……………長戸満男……………55

京都・平安京西市外町……………菅田薫……………57

京都・平安京右京六条一坊十三町……………梅川光隆……………59

京都・平安京右京七条二坊十四町……………久世康博……………60

京都・久田美遺跡……………吉岡博之……………61

大阪・大坂城跡(1)……………佐久間貴士……………63

大阪・大坂城跡(2)……………佐久間貴士……………64

大阪・大坂城跡(3)……………宮本佐知子・南秀雄・黒田慶一……………

森毅・鈴木秀典・伊藤純……………

松尾信裕・中川信作・鳥居信子……………67

大阪・上清滝遺跡……………村上始・野島稔……………76

| | | | | | |
|------------------------------|-----------|-----|-------------|-----------|-----|
| 大阪・日置荘遺跡 | 入江正則 | 80 | 滋賀・木部遺跡 | 徳網克己 | 107 |
| 大阪・上町遺跡 | 重金誠 | 82 | 滋賀・虫生遺跡 | 辻広志 | 108 |
| 大阪・小曾根遺跡 | 森幸三 | 85 | 滋賀・筑摩佃遺跡 | 中井均 | 109 |
| 兵庫・森北町遺跡 | 川口宏海 | 87 | 群馬・国分境遺跡 | 麻生敏隆・高島英之 | 111 |
| 兵庫・但馬国分寺跡 | 加賀美省一 | 89 | 福島・門田条里制跡 | 平野幸伸 | 113 |
| 兵庫・砂入遺跡 | 渡辺昇 | 91 | 岩手・胆沢城跡 | 佐久間賢 | 115 |
| 兵庫・嶋遺跡 | 渡辺昇 | 92 | 秋田・秋田城跡 | 日野久 | 117 |
| 兵庫・山国・源ヶ坂遺跡 | 森下大輔 | 93 | 富山・辻遺跡 | 山寄典子 | 122 |
| 兵庫・上滝野・宮ノ前遺跡 | 森下大輔 | 95 | 新潟・寺前遺跡 | 赤羽正春 | 124 |
| 愛知・清洲城下町遺跡 | 鈴木正貴 | 97 | 鳥取・天神山遺跡 | 中村徹 | 125 |
| 静岡・川合遺跡八反田地区 | 佐藤正知 | 100 | 岡山・百間川原尾島遺跡 | 岡本寛久 | 127 |
| 東京・多摩ニュータウン遺跡群 | | | 広島・草戸千軒町遺跡 | 下津間康夫 | 130 |
| (No.10七遺跡) | 石井則孝・竹花宏之 | 101 | 山口・周防国府跡 | 大林達夫 | 135 |
| 滋賀・西河原森ノ内遺跡 | 辻広志 | 103 | | | |
| 一九七七年以前出土の木簡(一一) | | | | | 137 |
| 奈良・平城宮跡(第三五次) | 寺崎保広 | 137 | | | |
| 森ノ内遺跡出土の木簡をめぐって | | | | 山尾幸久 | 139 |
| 木簡類による和名抄地名の考察——日本語学のたちばから—— | | | | 工藤力男 | 169 |

目次

彙報

内資人考……………春名宏昭
183

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「井」「季」「躰」等についてのみ使用した。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はミリメートル)。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである(六頁第1図参照)。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

々々 抹消した文字であるが、字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

○ 穿孔のあることを示す。



抹消により判読困難なもの。



欠損文字のうち字数の確認できるもの。



欠損文字のうち字数が推定できるもの。



欠損文字のうち字数の数えられないもの。

×

前後に文字のつづくことが内容上推定されるが、折損等により文字が失われているもの。



異筆、追筆。



合点。



木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。



校訂に関する注で、原則として釈文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ

編者が加えた注で疑問の残るもの。

ママ

文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

……

同一木簡と推定されるが、折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

II

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

*

図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（ ）内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。

一、釈文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

（ぎの一五型式からなる（六頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

広島・草戸千軒遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

削屑。

町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡一—』を参照されたい。なお
 その他の中・近世木簡については以上の型式番号に適合しないもの
 のが多いので、注記を省略したものもある。

位下財掠人安万呂
 行夜使仍注状故移

×位下財掠人安万呂
 ×行夜使仍注状故移

泉進上材十二条中 又八条×
 桁一条

「泉進上材十二条中 又八条×
 桁一条

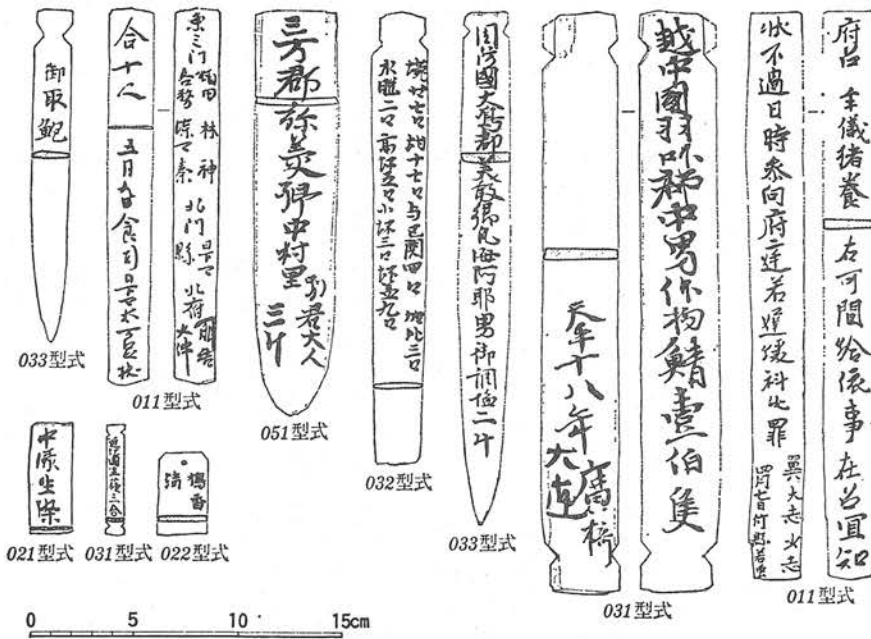
武蔵国男衾郡余戸里大贖一斗天平十八年十一月

「武蔵国男衾郡余戸里大贖一斗天平十八年十一月」

請飯 番長二人 舍人十七人
 史生一人 右依例所請如件

「請飯 番長二人 舍人十七人
 史生一人 右依例所請如件」

第1図 木簡積文の表記法



第2図 木簡の形態分類

奈良・平城京跡

- 1 所在地 奈良市法華寺町・二条大路南一丁目
- 2 調査期間 東二坊二条大路 一九八九年(平1)四月～五月・七月～九月、東二坊坊間路西側溝 一九八九年三月～五月・一九九〇年一月～三月、左京三条二坊八坪 一九八九年五月～六月、左京二条二坊五坪 一九八九年九月～一〇月、左京三条二坊一坪 一九八八年十一月～一九八九年三月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 平城京跡の調査では、一九八八年(昭63)八月～九月の「長屋王家木簡」の発見以降、東二坊坊間路西側溝や二条大路上の東西溝などから大量の木簡の発見が相次いでいる。これらは発掘面積が広いため、調査が数次にわたり、年度を越えたものもあるが、ここでは原則として対象を一九八九年度の調査に限定して遺構ごとに報告する

こととし、その上でこれまでの調査で得られた成果を概括することにした。

なお、ここで報告する木簡は、関係文献等で既に公表されているものから、木簡群の性格を特徴づけるものを抜粋したものである。

「長屋王家木簡」「二条大路木簡」の他の多くの木簡の積文、及び遺構の詳細については、関係文献を参照されたい。

一 東二坊二条大路の調査

(第一九八次調査B区・第二〇〇次補足調査・第二〇四次調査)

本調査はデパート建設に先立つもので、今年度は左京三条二坊一・二・七・八坪からその北の東二坊二条大路、さらに東院南方遺跡の一郭の二条二坊五坪へとその範囲を拡げた。昨年度の調査(第一九三次調査B区・第一九七次調査・第二〇〇次調査で、八坪の北側の二条大路南端の東西溝SD五二〇〇(従来SD一六〇と仮称してきたもの)から大量の木簡が出土し、その一部は既に前号で報告した。

SD五二〇〇は八坪の北側に沿って、東二坊坊間路西側溝SD四六九九(従来SD〇二と仮称してきたもの)の西一・二mのところから旧長屋王邸の北門の前(一坪と八坪の境)まで続く、幅二・六m、深さ〇・九m、長さ約一二〇mの溝状の土坑である。堆積は四層に分かれ、木簡は上から三層めの木屑層を中心に下三層から出土した。今年度はこれまで工事用プレハブ直下で発掘不可能だった部分を調査した(第二〇〇次補足調査)。これによりSD五二〇〇は、市道の下

で発掘不可能な部分を除きほぼ完掘したことになる。出土点数は、後述のSD五三〇〇に比べて削屑が多くはないものの一万五千点には達するものと思われる。

木簡の示す年紀は、天平三年から一一年で、中でも天平七、八年が特に多い。SD五一〇〇からは天平二二年の日付の墨書のある土器が伴出しているので、恭仁遷都の前後に埋められたものと考えられよう。

一方、SD五一〇〇とは別に、今年度新たに二条大路の北端、SD五一〇〇と対称の位置にも同様の東西溝SD五三〇〇を検出し、大量の木簡を取り上げた(第一九八次調査B区・第二〇四次調査)。SD五三〇〇もSD四六九九のすぐ西から始まるが、二条二坊五坪南面中央に開く門の手前でいったん途切れる。幅二・二・三m、深さ一・一・三m、総延長は約五六mである。門の西側から始まる東西溝SD五三一〇はその東端約六mを確認したに留まるが、近鉄線の線路下へ続き、SD五一〇〇と対象の位置まで延びるものと思われる。SD五三〇〇は完掘し、第二〇四次調査で出土した分は約一万四千字点のほり、第一九八次調査B区で出土したものと合わせて、SD五三〇〇全体では二万五千点を上回るものと思われる。

SD五三〇〇出土木簡の年紀は、神龜五年(一点のみ。次に古いのは天平三年)から天平八年にわたり、中でもSD五一〇〇と同様に天平七、八年のものが圧倒的に多い。

SD五一〇〇・五三〇〇・五三一〇の三条の溝から出土した木簡は年代のみならず内容的にも関連があり、遺構としての性格も共通なので、出土した木簡を合わせて「二条大路木簡」と仮称している。

これら三条の溝の遺物には、木簡以外のものにも顕著なものが多い。SD五三〇〇西端からは、躍動する馬の姿を描いた日本最古の絵馬、流れ落ちる滝を背景に中国風の楼閣を描いた「楼閣山水図」などが出土し特に注目される。墨書土器も大量に出土しており、主要なものに、SD五一〇〇の「兵」「中衛府厨/右兵衛(重ね書き)」「中衛厨」「薬院」「小子」など、SD五三〇〇の「兵部卿宅/□□」「兵」「左兵衛府」「右兵衛」など、SD五三一〇の「兵」などがある。

なお、SD五三〇〇の北側を平行して流れる二条大路北側溝SD五二四〇からも三九点の木簡が出土した。

二 東二坊坊間路西側溝の調査

(第一九八次調査A区・B区・C区、第二〇二一・二三次調査)

東二坊坊間路西側溝(二条大路北側溝SD五二四〇以南の、従来SD〇二と仮称してきた部分)がSD四六九九、SD五二四〇より北がSD五〇二一の調査は、これまでデパート建設に先立つ第一七八次調査と第一九三三次調査A区・B区で約一七〇mを発掘した(出土木簡点数四六一点)が、引き続きSD四六九九を第一九八次調査A区・B区で約二〇m、同C区で約一〇m、またSD五〇二一を駐車場用地の調査である第二〇二一・二三次調査で約三〇m発掘し、調査総延長は計

約二三〇mに及ぶ。SD五〇二二は、幅約二・五m、深さ〇・九
一・一mで、当初やや幅狭く掘削された(最下層)ものが一旦埋まり、
その後幅を広げた後にさらに二時期の流れがある(下層・上層)。

出土点数は、SD四六九九が五〇点、SD五〇二一が一六〇点を
数える。年紀はSD四六九九については和銅八年(天平元年とする
従来の知見の範囲にほぼ収まるが、SD五〇二一からはSD四六九
九には見られない天平一九年のものが二点出土している。ただ、S
D五〇二一内の層位ごとの顕著な年代の差は見られない。なお、S
D四六九九からも墨書土器がまとまって見つかっており、「左兵衛
府」「中衛府」などSD五一一〇〇・五三〇〇出土の墨書土器と内容
的に重なるものも見られる。

三 左京三条二坊八坪の調査(第一九三次調査F区)

一九八八年度にデパート建設に関連して実施した第一九三次調査
E区の補足のための調査で、「長屋王家木簡」と仮称している大量
の木簡の捨てられていた南北溝SD四七五〇(従来SD〇一四と仮称
してきたもの)の完掘を目的とした調査である。検出した遺構は、建
物一棟、溝二条、井戸一基、土坑四基などである。今回の調査に
より、SD四七五〇の北端を検出し、その全長が二七・三mである
ことを確認するとともに、約七五〇点の木簡の出土をみた。SD四
七五〇全体では、当初の予想を上回り約四万点に達する見込みであ
る。

四 左京二条二坊五坪の調査(第二〇二九次調査)

第一九八次調査B区や第二〇四次調査を行った東院南方遺跡の一
郭の左京二条二坊五坪の北端に位置する調査区である。立地を反映
して小面積の調査の割に遺構の密度は高く、検出した遺構は建物三
棟、塀三条、溝四条、井戸一基、土坑三基などで、四期にわたる時
期変遷がある。木簡は、調査区の北壁に近い土坑状の穴SX五四七
三、及びその三m西で検出したSX五四七二から、各一点出土した。
後者は建築部材の破片に墨書したものである。

五 左京三条二坊一坪の調査(第一九五次調査・第一九七次調査)

この地域の木簡出土については前号でも触れたが、一九八九年出
土の一九点から主なものを報告する。内訳は、土坑SK五〇七四
(従来のSK一六三)が二点、井戸SE五〇七五(同SE一四八)が
五点、井戸SE五一一三五(同SE一二六)が一点、井戸SE五一四〇
(同SE一三三)が一点である。なお、井戸SE五一四〇及び一坪の
遺物包含層からは、「官厨」の墨書のある土器が出土している。

8 木簡の積文・内容

一 東二坊二条大路

東西溝SD五二〇〇(旧SD一六〇)

- (1) ・「内膳司解 申請荷持丁事 二人持十荷 合卅荷」
・「右為今月廿六日御幸行供奉料件荷持右如」

- (2) 「左兵衛出雲佐為麻呂
兵部省召 出雲淨麻呂 右今日不過參向省家
江野麻呂
付□村安万呂
天平八年十一月廿八日大録田辺史真立」
302×38×5 011*
- (3) 「請」請大角豆一升
「右□為□□□三月七日六人部諸□」^{〔人カ〕}
263×(21)×8 081
- (4) 「左京五条進槐花一斗八升 坊監中臣君足
□小子五人功錢十五文功別五
升^{〔拾カ〕}
天平八年六月十四日坊令大初位下刑部舍人造園麻呂」
262×31×3 011*
- (5) 「右京四条進槐花六斗 六月八日少属大綱君
智万呂」
264×37×3 011
- (6) 「右京三条進礫六斛 乘車式両 一礼比古□□
物部連加保□□」
「天平八年十月廿三日坊令文伊美吉牟良自」
360×48×4 011
- (7) 「池辺御園司 進埴器惣五百八十六口 □□
(280)×24×5 019
- (8) 「從意保御田進上瓜一駄 負瓜員百十六果
又一荷納瓜員八十果」
「合百九十六果 丁□伎
天平八年七月十五日国足」
173×35×3 011*
- (9) 「南宅進上 蒸莢角豆六把 大豆三根
瓜八碩 棒桃子十六丸」
「天平九年八月四日賀茂安麻呂」 190×30×1 011
- (10) 「宿直資人 丈部廣国 仕丁一人
天平九年三月十五日」 (195)×25×3 019
- (11) 「内資人宿 日下部乙万×
忍坂乙万×
尾張沙×
天平八年四月廿日」 (104)×43×2 019
- (12) 「供奉卅六人 司一人 奴六人 直丁十人
宮人五人 婢十四人
九月五日」 258×32×6 011
- (13) 「芳野幸行用貫簀」
「天平八年七月十五日」 141×23×3 032

(14) 「瓜四百六十二顆直錢一百卅三文之中 大七十顆 別一文二顆
小三百九十二顆 別一文四顆」

・「柿子一石四斗二升直錢八十五文 別斗六文 合四種物直錢三百七十四文
梨子三斗直錢卅文 別升一文 茄子四斗二升直錢一百廿六文 別升三文」

323×47×4 011

(15) ・□八合 □□□□ 文部子虫八合充丈部廣国 資人
大友春山八合充□国□師

・天平八年□□□□ □ (188)×(12)×4 081
〔掃守カ〕

(18) 「殿東殿器鑑
南西瓦蓋殿鑑
北檜蓋殿鑑
南細殿外方鑑」

南細殿外方鑑

78×67×7 011

(16) ・「□□□五合

五日間食米□□□□ □□尔久万呂二升
□九口 □升六合
×理万呂一升四合」

(19) ・「近江国乘田佃錢老仟文」

・「天平六年」

94×19×3 032

・「天平九年正月五日掃守乙万呂」

280×58×3 011

(20) ・「河内国古市郡坂本郷調錢」

・「老貫 天平十年
白鳥犬甘」

111×22×5 032

(17) ・「大弁司兼器司

宗縁尼 堂司 安峻 飯司 海藻司
眞心尼 善信 善味尼 明聲尼
慧福尼 □人 善照尼 勝心尼」

(21) 「参河国播豆郡篠嶋海部供奉間七月料御贄鯛楚割」

「六斤」

259×22×4 031

・「□□

淨福尼 贊□ □女
蜜聲尼 安表 安弟 榮慧 右六人

(22) 「参河国播豆郡析嶋海部供奉八月料御贄佐米楚割」

「六斤」

240×21×5 031

369×(48)×5 011

- (23) 駿河国安倍郡中男作物堅魚煎一升
 ・ 天平七年十月 泉屋郷栗原里 (111)×11×3 081
- (24) 「駿河国駿河郡柏原郷小林里戸主若舎人部伊加麻呂戸若舎人部人」
 ・ 麻呂調荒堅魚十一斤十兩 天平七年十月 315×18×3 011*
 「」
- (25) 「駿河国駿河郡柏原郷小林里戸主若舎人部伊加麻呂戸若舎人部人麻呂調」
 ・ 荒堅魚六連八節 天平七年十月 315×17×4 011*
 「」
- (26) 「伊豆国」
 ・ 「」
 ・ 「」 堅魚二百八十六隻 182×26×5 082
- (27) 「伊豆国賀茂郡賀茂郷題詩里戸主矢田部刀良麻呂口矢田部刀良調荒堅魚十一斤十兩『十一連二丸』」
 天平七年十月 408×34×5 031*
 「」
- (28) 「伊豆国賀茂郡賀茂郷題詩里戸主矢田部刀良麻呂口矢田部刀良調荒堅魚十一斤十兩『十一連二丸』」
 天平七年十月 388×37×4 011*
 「」
- (29) 「伊豆国安房郡廣湍郷河曲里丈部牛麻呂輪調鰻陸斤 陸拾条 天平七年十月」
 296×31×4 031
- (30) 「伊豆国安房郡廣湍郷川曲里戸丈部牛麻呂調鰻陸斤 陸拾条 天平七年十月」
 284×21×8 031

- (31) 「若狭国遠敷郡 佐分郷岡田里 三家人宮足」
 ・「御調塩三斗 天平六年十月十日」 157×31×4 031*
- (32) 「若狭国遠敷郡 佐分郷岡田里 三家人宮足」
 ・「御調塩三斗 天平六年十月十日」 168×36×4 031*
- (33) 「因幡国法美郡廣端郷清水里丸部百嶋中男作物」
 〓海藻御贄陸斤 天平八年七月」 373×26×5 031
- (34) 「隱伎国周吉郡 山部郷市厘里雀部老人 調烏賊六斤 天平七年」
 160×35×3 031
- (35) 「播麻国多可郡中郷封戸白米□□□五斗」
 (191)×(17)×5 033
- (36) 「美作国大庭郡大庭郷茜十斤 籠十兩」
 155×14×4 031
- (37) 「長門国大津郡鯨耳漬卷缶 二斗」
 ・「天平八年九月」 138×30×8 032
- (38) 「紀伊国海部郡浜中郷大原里御贄安遅魚一斗」
 228×22×3 031
- (39) 「阿波国那賀郡幡羅郷海部里戸主阿曇部大嶋戸」
 〓同部若万呂調御取鯨「六斤 天平七年」
 十月」 277×18×4 031
- (40) 「讃岐国進調梶櫃 天平五年」
 99×20×3 032
- (41) 「讃岐国鵜足郡二村郷中男作物干鮪六斤 中」
 ・「天平八年九月」 188×18×4 031
- (42) 「伊与国和気郡海部郷若日下部廣嶋楚割六斤」
 234×19×6 032
- (43) 「大宅里大穴」(檜扇)
 293×28×1 061
- (44) 「三宅小麦一石」
 (158)×21×3 033

東西溝SD五三〇〇

(45)

〔池辺波利 大鳥高国 八多徳足 史戸廣山

中宮職移兵部省卿宅政所 太宿奈万呂 川内馬飼夷万呂 村国 万呂 大荒木事判

杖部廣国 日下部乙万呂 東代東人 太屋主
秦金積 太東人 山村大立 陽侯吉足

〔狭井石楯 右十九口舍人等考文錢人別三文成選六文又官仰給智

馬国人 識錢人別一文件錢今早速進來勿怠緩

〔他田神 大属 少進 天平八年八月二日付舍人刑部望麻呂

261×42×3 011*

(46)

〔牒 五十長等所 進入人堤家主右人

〔取今月五日酉時進入如件 九月五日付得

嶋 263×29×3 011

(49)

〔岡本宅謹 申請酒五升 右為水葱撰雇女

〔給料 天平八年七月廿五日 六人部諸人

266×29×4 011

(47)

〔牒東宅司所蘂冊束 右物依數

〔暫借明日報納故牒 九月二日大友真君

245×34×5 011

(50)

〔請器 壺三口 一口四升受 二口各五升受 瓶一口一升受 右物幸行御莫備納料

〔天平八年七月二日六人部諸人

324×36×4 011

(48)

〔政所 牒岡本宅司 毛瓜廿顆

〔知此状依數進送故牒 天平八年七月×

(212)×44×5 019

(51)

〔荒炭一籠右物今忽要須請付使

〔借処分具状以牒 天平八年七月廿日大友真君状

324×44×5 011*

- (62) 「○左京職進 鶏一隻 馬宍三村
雀二隻 鼠一十六頭
」
「○ 天平八年四月十四日
從六位上行少進勳十二等百濟王『全福』
199×35×4 011
- (63) 「左京職進 雀廿五隻
鼠一十九頭
」
「 天平八年四月十三日
從六位上行少進勳十二等百濟王『全福』
200×35×4 011
- (64) 「西市進上 真木灰老斛
」
「請先進上真木灰 天平八年七月廿九日大原廣津
六斗直申送
286×33×5 011
- (65) 「園池司 佑出雲鎌束 進 熟瓜卅顆
生角豆廿把
」
「 天平八年七月廿四日付奄智造繩麻呂
330×46×4 011
- (66) 「佐紀瓦司進上 楯十一荷 数二百枝 右付粟
○
」
「直少万呂申送以解 天平八年十二月八日史生出雲廣□□○
415×30×6 011
- (67) 「越田瓦屋進上借子四人 守人足□楯
□屋酒人
」
「物部古万呂 水櫃
天平八年七月六日 取子一点進上
出雲熊 垂水真鷹 右
内棟馬甘
」
(両面に習書あり)
369×(51)×10 081
- (68) 「櫛本三宅進上水葱種事 合卅四束 直錢六十八文 ○
」
「一束別錢二文充請 天平八年五月十四日依羅真万呂○
308×32×4 011

(59)

「大石毛野 志貴子老 伯祢大魚 佐本乙万呂
直資人十一人 田部諸君 荒田公万呂 秦真葛 狛安德 ○

太乙万呂 屋形諸魚 佐伯古万呂

「志貴子老

宿資人三人 伯祢大魚 天平八年五月三日田部諸公

狛安德

311×45×2 011

(60)

「膳所宿直 合二人 奴少君万呂 婢有々女

岡屋臣足

「直資人一人 天平八年六月廿一日」

350×44×3 011

(62)

「宿直 六人部諸人 婢客屋女」

302×(20)×4 081

(63)

「二門 佐伯 皇后宮 雪 少山田 画師×
大伴 丈 土部 参河×

「合一十二人依数入奉」

(161)×24×2 011

(61)

「御厩宿直 丈部人根 奴東人 百齐身麻呂

「直 丈部廣国 天平八年六月廿一日」 265×34×6 011

(64)

「十一日不食米一斗一升六合

土師石前八合 阿刀真公八合 日下部海子八合 阿刀飯主六合
土師嶋村八合 家令一升四合 豊国廣虫八合 丸部田主七合
田辺僧万呂八合 忍坂乙万呂八合 丸部武藏一升 上虎万呂七合
尋津福万呂八合 赤染秋足八合 佐味梶取六合

「天平八年五月十一日 荻田孔足」 365×38×6 011

(65) 「人員二百二人 百九人 別三升 飯三石三斗
九十三人 別一升五合 飯一石四斗
三石一斗〇一石四升
合飯四石七斗」

・「豎子所三人 左衛士卅九人 丈部二人
木工寮七人 右卅九人 領八人
造宮八十三人 衛門廿一人」

302×50×6 011

(66) 「右京七条二坊戸主勲十二等台忌寸千嶋之戸口千人 年十六」

・「右人所盜依豎子放依状注坊令等宣令知 八年十月廿九日」

330×35×6 011*

(67) 「出拳錢數 古斐卅七文
美濃麻呂七文
若佐五文」

(68) 「<鷹所 藪部伊賀万呂 雪牛養
凡人足 鳥取咋麻呂」

202×32×4 032

・「船五文」

沙美五文 天平五年二月九日
魚麻呂四文 合六十二文 (1.2)

(69) 「西坊 返二未一 受古智麻呂
充玉箒三条 奴
七月廿四日」

186×34×3 051

(70) 「油二升一合 大殿常燈料 日別三合 油八合 膳所料 三日料
七日料
○油七合 文基息所燈料 日一合 油六合 内坐所物備給燈料
油一升四合 天子大坐所燈料 油四合 召女豎息所燈料
合六升」

・「此物能量者患道者吾成明公莫憑必退西陽道」(天地逆) 山

350×80×15 061

(71) 「〈近江国坂田郡上坂郷戸主敷」

・「〈田虫麻呂戸庸六斗 147×17×5 033

(72) 「〈石見国那賀郡右大殿御物海藻一籠□□連 天平=

〓七年六月〓」 335×40×6 031*

(73) ・書吏六人部連

・□□□□ (144)×(10)×3 081

東西溝SD五三一〇

(74) ・「岡本宅 上進青角豆十把 〓

・「天平八年七月廿日田辺久世万呂」 260×37×5 011*

二条大路北側溝SD五二四〇

(1) ・「〈淡路国津名郡□□餅郷人夫」

・「〈海部荒海調三斗 〓 (192)×40×6 032

「二条大路木簡」の特徴としては、まず第一に「長屋王家木簡」に優るとも劣らない質・量の豊かさ、第二に二条大路上というかつて例をみない遺構から出土したという点、第三に木簡の内容が、出土場所によりかなり顕著な偏りをみせていることなどが挙げられる。「長屋王家木簡」と比べると、個人の家政機関内部の木簡群を含み

ながら、より公的な色彩が強く、平城宮出土の木簡に近い。内容的にもヴァラエティーに富んでおり、遺構の性格からも単純には一括遺物としては扱えず、その使用場所の特定には今後さらに慎重な検討が必要である。

これまでの検討によると、「二条大路木簡」には大きく二種類の木簡群が含まれていることが明らかになってきた。一つは、SD五三〇〇西端やこれに向かい合うSD五二〇〇中央部分などに顕著にみられるもので、個人の家政機関、具体的に言えば当時の兵部卿藤原麻呂に関わると考えられるものである。その主要な根拠は(4)木簡である(詳細は後掲の関係文献参照)。宿直木簡(00・01、59・62)や食料支給木簡(69・66・64)も同じ家政機関内の木簡であり、これらはその出土位置からみて二条大路の北側の左京二条二坊五坪から投棄された可能性が強く、東院南方遺跡の一郭に藤原麻呂邸を想定する根拠となっている。ただ、個人の家政機関の木簡といっても、聖武の吉野行幸に関わる(後述)など、「長屋王家木簡」に比べるとやや複雑な要素もありそうである。

もう一つはSD五一〇〇西端に顕著にみられるような多量の荷札木簡を含む一群で、参河国幡豆郡のものを始めとする大量の贄の荷札を含むことを大きな特徴とする。同じ地区からは大命と記すものや大膳職のものと考えられる木簡(前号8)、東大寺の前身の金鐘山房からの解(前号5)なども出土しており、聖武天皇や光明皇后との

関わりの深い木簡群ということができよう。

第二の木簡群は、その出土位置から考えて、南側の三条二坊八坪から投棄されたと考えられ、旧長屋王邸の跡地利用を考える上での重要な材料となる可能性が強い。

ところで、第二の木簡群と同じSD五一〇〇の西端、及び同じ溝の東端、さらに長屋王邸の東側の東二坊坊間路西側溝SD四六九九からは、前述のように中衛府や左右兵衛府に関わる墨書土器がまざままみつかっている。これらの衛府関係の墨書土器は、あたかも旧長屋王邸を囲むような形で分布しているが、これらは「二条大路木簡」と伴出しているわけで、長屋王の変の時に邸を取り囲んだ軍隊のものというよりは、長屋王邸跡地に設けられた何らかの施設を衛府が警備したことを示すと考えられる。前号の(6)や、(8)のような門の警備の木簡も、旧長屋王邸の警備に関わるものとみられよう。

このように考えると、旧長屋王邸は、大量の贅を消費し、衛府の軍隊が警備するような何らかの施設として再利用されている、という状況が窺える。ただ、その性格を特定するような史料には、これまでのところ恵まれていない。

ここで問題になるのは、第一の木簡群と第二の木簡群の関係である。前者が二条大路の北側の二条二坊五坪、後者が南側の三条二坊八坪に由来すると考えた場合、両者が全く無関係に捨てられたとは考えにくく、南側に設けられた施設に兵部卿藤原麻呂が何らかの関

わりを持った可能性もある。「二条大路木簡」に含まれる個人の家政機関の木簡に外部との交渉を示すものが多く含まれるのは、これらが麻呂の公務遂行（強いて言えば三条二坊八坪に関わる）にその家政機関が関与したために残った木簡群であるからではなからうか。

以上、推測にわたった面もあるが、「二条大路木簡」は、長屋王没後のこの周辺地域、東院南方遺跡を含む平城宮東南の重要地帯の天平初期のあり方を如実に写す史料として、この地域を一体として捉える必要性を提起しているといえよう。

次に、木簡を内容別に概観すると、文書木簡には、(4)・(9)、(6)・(7)のような進上状が特に多い。これらの進上状は出土位置からいえば、藤原麻呂の家政機関に関わるものであろう。但し、(6)・(8)は離れた位置から出土しており、第二の木簡群に属する可能性もある。なお、岡本宅の木簡(49)に署す六人部諸人は、宿直木簡にもみえる(62)、行幸用度の調達にも関わっている(60)。(1)・(13)・(60)にみえるこの行幸は、(13)などから『続日本紀』に記事のある天平八年六月から七月にかけての吉野行幸であることがわかるが、このような六人部諸人の関わり方から考えると、彼の勤務する藤原麻呂の家政機関が吉野行幸の用度の調達・分配に与っていたことが知られる。

(4)は「長屋王家木簡」と「二条大路木簡」に数点ある当時の物価を示す木簡の一つで、正倉院文書と比較すると奈良時代の物価上昇の様子が明確に窺える。

荷札木簡はほぼ全国にわたるが、中でも参河・駿河・伊豆・安房・若狭・隠岐・近江のものが多い。このうち近江のものだけは、SD五三〇〇西端のみに集中しており、出土状況として注目される。このことは近江国の庸米が二条大路に北接する施設で使用されたことを示唆する。伊豆のように従来知られていた数の三倍に及ぶ荷札の見つかった国もあり、荷札木簡の点数は飛躍的な増大をみた。(24)と(25)、(26)と(27)、(28)と(29)と(30)と(31)と(32)のように同一人同一年の荷札が見つかった例もある。個々の荷物のありかたから、各国内での徴税のあり方、国ごとの比較、さらには税制そのものについて、計り知れないほどの豊かな考察材料が提供されることになった。

「長屋王家木簡」は個人の家政機関内の木簡というこれまでに類例のない貴重な史料を提供したが、「二条大路木簡」は平城宮木簡に限りなく近く、しかもそれ以上に動的な生の史料を提示してくれている。いずれもまだ整理・解読の途上であり、今後さらに重要な論点を提供してくれるものと期待されるが、いずれにしても、両木簡群によってもたらされた木簡の飛躍的増加が、木簡研究の新たな一頁を開いていることは間違いない。

二 東二坊間路西側溝

東二坊間路西側溝SD四六九九(旧SD〇〇二)

(198次A)

- (1) 「飯二升充大縣起万呂大隅乙万呂」
・「十月九日書吏」
141×14×3 011
- (2) 「藻上郡 十六斤 山辺郡 卅二斤 式下郡 二百斤」
・「右二百卅八斤」
203×(28)×2 081
- (3) 「参河国播豆郡篠嶋」
(207)×(17)×4 039
- (4) 「伊豆国田方郡有参郷桜田」
・「養老六年」
(210)×32×5 039
- (5) 「醬」
48×18×5 032
- 東二坊間路西側溝SD五〇二二
(198次B)
- (6) 「泉坊進上覆盆子一古」
天平十九年五月十四日桑原新万呂
167×24×3 011*
- (7) 「美作国勝田郡塩湯郷庸米六斗 里」
・「服部足倍」
(232)×32×5 039

(202-13次)

「大都保一口并用□□直百文

(8) 請錢一貫

白□□□
漆一升三合(ヤ)
合別六十文

||直六百文|

・「遺錢冊文」

(117+171)×30×5 011

(9) 「上番従八位上御立史足国」

・「上番従八位上御立史足国」

115×16×3 011

(10) 「宿直×

・□□

(80)×(12)×7 081

(11) 「左大臣官交」〔易カ〕

・「額」
□□田古安米

(82)×19×4 019*

(12) 兵衛

・□□勲九等

(58)×(27)×4 081

(13) 「長門国美祢郡『調綿彦伯屯

天平十九年九月』」
410×39×7 031

(14) 「大倭国志癸上郡大神里」

(軸木口)

・「和銅八年
計帳

」
長315×幅19 061*

SD四六九九・五〇二一出土の木簡は、道路の側溝という遺構の性格を反映して、かなりヴァリエーションに富む内容となっている。年代的にも長屋王の生存していた時代からその没後にまたがる。

(1)は書史がみえるので、三品以下の親王ないし三位の位にある者の家政機関の存在を窺わせる。(3)は(4)とともに長屋王生存中のものと考えられ、長屋王邸内からも同時期のものと考えられる幡豆郡の贄の荷札が出土していることが想起させられる(後掲五(1))。総じてSD四六九九には長屋王の生存中ないし長屋王の変直後の頃までのものが多い。

これに対して、SD五〇二二の木簡は、「長屋王家木簡」よりはむしろ「二条大路木簡」との関連を考えさせる内容のものが多い。(9)や(12)にみえる番上官や(10)の宿直などは、SD五三〇〇出土木簡と内容的に関連がある。一方、(14)の計帳の軸は、養老元年の大計帳式頒下以前のもので、計帳制度の変遷を考える上で、重要な論点を提示することになる。一里分で一巻を構成していることも合わせて考えると、養老元年より前からの畿内の計帳歴名京進はほぼ確定的となった。これがどこから廃棄されたのか、(6)(13)の天平一九年の木

簡二点とともに、東院南方遺跡との関わりを含めて今後の議論の進展が期待される。

三 左京三条二坊八坪

南北溝SD四七五〇(旧SD〇一四)

- (1) 「御命宣 宮六張急々取遣仕丁」
・二人 三月五日 巳時四点 廣足」
291×36×4 011
- (2) 「○都祁遣雇人二口五升帳内一口一升受」
・「○智^{〔善之〕}□九月廿六日 石角 書吏」
148×21×2 011
- (3) 「○牛乳煎人一口米七合五夕受稲万呂」
・「○ 十月四日大嶋」
157×18×2 011*
- (4) 「障子作画師一人米二升」
・「障子作画師一口帳内一口米^{〔半升カ〕}□□」
193×19×3 011
- (5) 「仏造帳内一人米一升廝一人米二〇」
・「升受仕丁梗麻呂八月十日 書吏^{〔万呂〕}□」
215×28×4 011*
- (6) ・新羅人一口一升 受持万呂○」
・七月卅日 甥万呂 ○」
(182)×18×3 019
- (7) 「炭焼処打蒔分米一升受 ○」
・「壬生安万呂書吏人給米一升受赤○」
人 □月十二日石角」
141×27×1 011
- (8) 「○柱立所祭米半^{〔升カ〕}□」
・「○ 八月九日嶋」
(114)×15×2 019
- (9) 「○^{〔余慶造始カ〕}□□□人功給遣錢百十二文 別移務所下総」
|| 税司田辺」
・「○史□□進布五百常之中 二百常馬司給
五十常門部王宮給 ||
- (10) 「錢一貫」
・「敵火連大山 右二人檢校」
檜前主寸安麻呂」
100×25×6 015
- (11) 「∨足庭郡足×」
・「∨一石北宮」
(74)×19×3 039
- (12) 「∨北宮□□ ∨」
・「∨阿知贄五斗∨」
163×27×3 031

- (13) 「V北宮御物俵余戸里五保」 217×27×4 033
- (14) ・「V余戸里俵一石漢人小祢」
 ・「V北宮^{〔之カ〕}物七月廿三日」 189×23×3 033*

「長屋王家木簡」は基本的には個人の家政機関内部の木簡群であり、その枠組は一九八八年出土のものではほぼ定まったといっても過言ではないが、邸内の機構やそこに働く人々を始め家政機関内の様子は今後の整理の進展に伴ってさらに鮮明になってゆくと思われる。

(1)の御命は廣足が署すことからみて、吉備内親王の命令とみられる。(2)は氷室の存在の明らかになった都祁の庄地の直接経営を示す。(3)は長屋王邸での牛乳の利用を示す二点めの史料で、今回のものは煮つめて食に供している。(4)の障子作画師、(5)の仏造帳内はともに初見。邸内の荘殿に携わったのであろう。(6)は『懐風藻』にみえる新羅使への肆宴を思わせる。(7)の炭焼処、(8)の柱立所も初見。(9)は下総税司のもたらした布の配分を示す興味深い史料。(10)はさし銭の付札か。今回の調査では(11)(13)のような北宮宛の荷札が比較的まわって出土しており、宮跡庭園出土の北宮木簡との類似が目される。発掘地が北宮とも呼ばれたことはほぼ間違いないだろう。

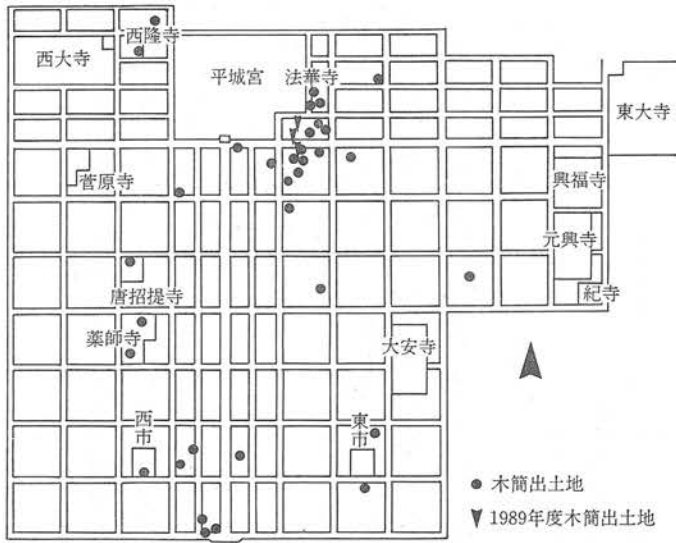
- 四 左京二条二坊五坪
 土坑SK五四七三

- (1)  人米一升五〇×
 (102)×(27)×2 081
- 五 左京三条二坊一坪
 土坑SK五〇七四(旧SK一六三)

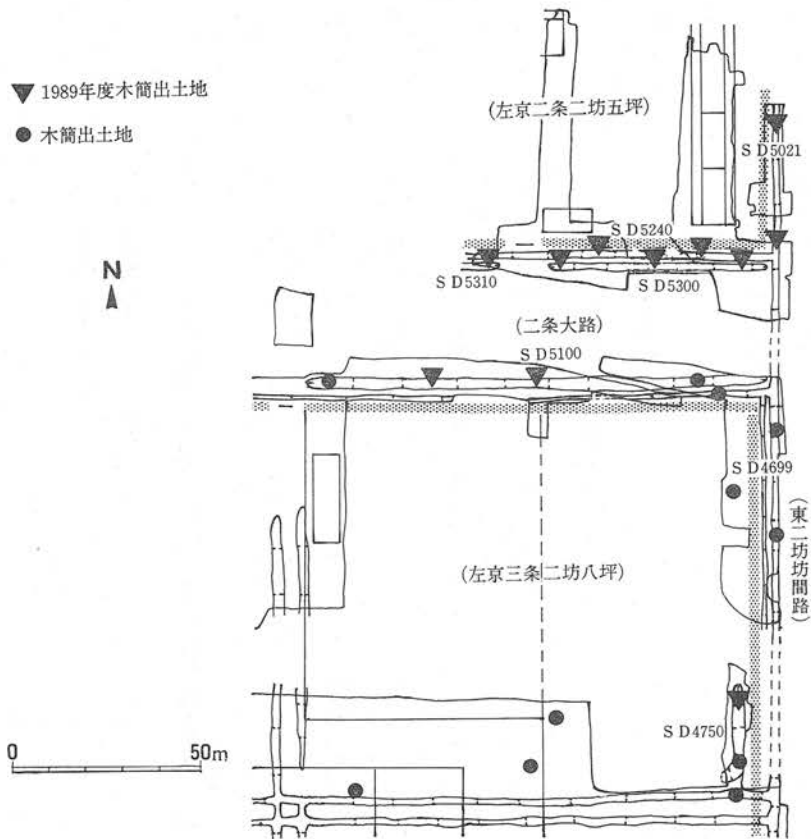
- (1) 「V参河国播豆郡析嶋海部供奉七月料御贄佐米六斤」
 268×27×3 032
- (2) ・□□□納六〇斤小 神亀五年六月V
 ・廿斤 V (222)×18×5 039
- 井戸SE五一三五(旧SE一二六)
- (3) 「V英多郡吉野郷黒葛十斤」 222×20×2 032
- 井戸SE五一四〇(旧SE一三二)
- (4) ・「V阿波国阿波郡小麦」
 ・「V宝亀七年」 125×20×3 032

9 関係文献

- 奈良国立文化財研究所『一九八九年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九九〇年)
- 同『平城宮発掘調査出土木簡概報』22、23(一九九〇年)
- 同『平城京長屋王邸宅と木簡』(一九九〇年) (渡辺晃宏)



平城京木簡出土地点図



「二条大路木簡」「長屋王家木簡」出土地と近辺の遺構略図

奈良・平城京左京二条四坊十一坪

1 所在地 奈良市法蓮町

2 調査期間 一九八九年(平一)七月～一月

3 発掘機関 奈良市教育委員会

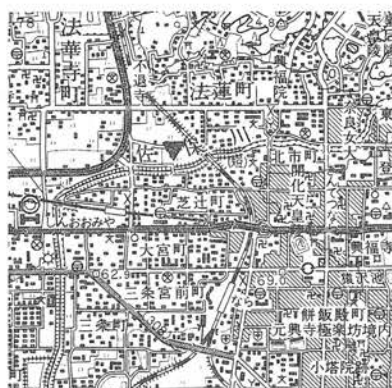
4 調査担当者 西崎卓哉・森下浩行

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京左京二条四坊十一坪の東半部北寄りにあたり、今回、小学校建設に先立って約二五〇〇㎡を発掘した。検出した主な



(奈良)

遺構は、条坊遺構では二条条間路の一部とその南側溝、十一坪と十四坪との坪境小路、十一坪内の遺構では掘立柱建物三五棟、塀一三条、井戸九基、溝三条などである。これらの遺構には六時期の変遷があり、このうち建物の配置状況がもっとも

よくわかる第二期には、坪の東半二分の一町を利用した建物配置であることが知られた。木簡は第六期に属する二つの井戸から出土した。井戸SE五五は掘形の底に円形曲物を据えた後、内法一辺九二cmの方形縦板組の井戸枠を組む。井戸SE五七は内法一辺一一五cmの方形縦板組の井戸枠を組む井戸である。いずれも枠内から平城宮土器編年第六期の土器が出土した。

8 木簡の積文・内容

(1) [宇字カ] 宇字宇字

[志志カ] 宇字

(136) × (11) × 2 081

(2) 勲一等

[志志カ] 勲一等

(99) × 96 × 3 081

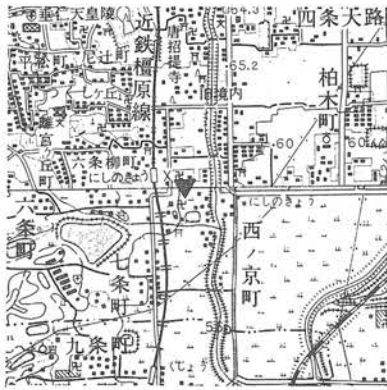
(1)は井戸SE五七の枠内から出土。上下端は欠損、左右両側面も削り取られている。この井戸からは他に削屑が二〇点出土したが、いずれも小片であり積読できない。(2)は井戸SE五五の掘形から出土。上下端は欠損、縦二片に割れている。

9 関係文献

奈良市教育委員会「平城京左京二条四坊十一坪の調査」(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』一九九〇年) (西崎卓哉)

奈良・薬師寺

- 1 所在地 奈良市西ノ京町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)十一月～一九八九年一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良・桜井)

薬師寺の伽藍復興計画の一環としての回廊の再建に伴う事前調査で、西面回廊のほぼ中央部を対象に行なった。薬師寺回廊は当初、単廊で計画され、その後、複廊で完成したことは、すでにこれまでの調査で明らかにされており、今回も同様の状況を確認した。回廊の遺構は、礎石はすべて抜き取られていたが、単廊については西南入隅から数えて一一間目から七間分にあ

たる礎石据え付け掘形一〇箇所、複廊は中央柱列と東側柱列の合計一四箇所を掘形を検出した。また今回の調査のもうひとつの目的であった金堂と西面回廊とをつなぐ軒廊の有無については、金堂に向かう東西南方向の基壇、雨落溝等の痕跡は全くなく、軒廊は当初から存在しなかったと判断される。出土遺物には薬師寺創建の軒瓦を始めたとする大量の瓦、少量の土師器・須恵器がある。

木簡が出土したのは回廊基壇の西縁に沿って流れる南北大溝からで、伴出遺物には近世陶磁器がある。木簡は二点出土したが、釈読できる一点を掲げた。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「タヘンヲロカニ」

・「セ□ンチサ」

96×16×1 011

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『昭和六三年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八九年)

(森 公章)

奈良・西大寺

- 1 所在地 奈良市西大寺芝町一丁目
- 2 調査期間 一九八九年(平一)八月〜一〇月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 発掘担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代〜近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

本調査は一九八九年度の防災工事に伴うもので、西塔跡北東部を中心に、ここから北の本坊、東の愛染堂、東塔跡近くなどに至る幅

一・五m、総延長約一三〇mのトレンチを設定して実施した。検出した遺構および遺物の詳細は関係文献を参照していただくとし、ここでは対象を木簡が出土した遺構と同時期のものに限定する。木簡はトレンチの南西にあたる近世の土坑

(SK三三)から出土した。土坑からは若干の瓦・土器が出土しているが、明確に時期を決定する材料はない。同時期の遺構として、溝六条、礎石建物二棟、瓦を用いた便所などがあり、建物は位置から考えて、元禄十一年(一六九八)「西大寺伽藍敷地并現存堂舎坊院図」などの古絵図に見える龍池院に関連するものと思われる。

8 木簡の積文・内容

- (1) 〔西大寺〕
 寺龍池院荷物 江戸本

大坂北草屋町善南筋東へ入南側

登 隼人様 金剛院 ○

ちん濟八つ之内 』

・『南無観世音菩薩』

○ 』
 267×78×7 065

木簡は現状では蓮弁形をしており、表・裏の文字は別筆と考えられる。形態は、「西大寺龍池院荷物」の荷札を二次的に蓮弁形に加工したものである。大坂北草屋町は現在の大阪市中央区船越町にあたり、その町名はすでに江戸時代初期の絵図に見える。延宝三年(一六七九)、二町に分け、北草屋町一丁目、二丁目となったというが、本木簡の場合、何丁目を略した可能性もあり、二町の分置により木簡の年代を決定することはできない。この木簡は龍池院荷物の

荷受先が「大坂北葺屋町善南筋東へ入南側／＼登□隼人様」であることを示し、荷物はさらに奈良の西大寺に送られ、荷札はそこで廃棄されたのであろう。「江戸本□□□／＼金剛院」は位置としては差出にあたるが、西大寺の塔頭にも金剛院があり、この部分の解釈は不詳である。

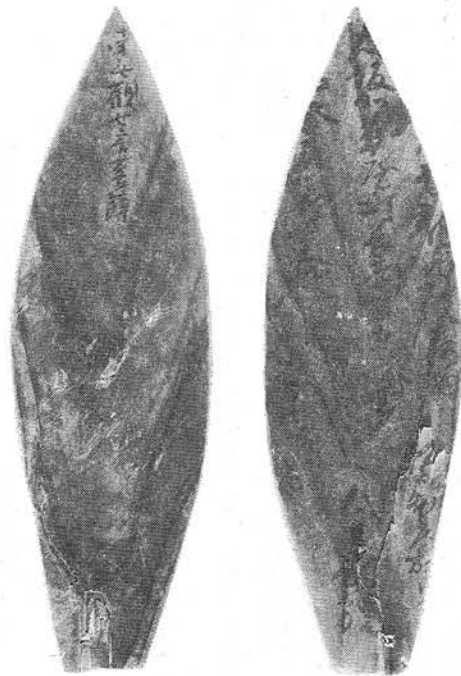
なお、裏の「南無観世音菩薩」の「南」の右上端は欠けており、蓮弁形に加工する以前から墨書されていたのか、加工の際に墨書され、やや削りすぎたものかは明らかではない。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『一九八九年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（一九九〇年）

西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（一九九〇年）

（森 公章）





(桜井・吉野山)

の左岸河岸段丘上に位置している。飛鳥から山田道を経て東国へぬける街道筋に位置し、メスリ山古墳の北二〇〇m、艸墓古墳の東一五〇mにあたる。遺跡の立地は、南・北・西がふさがれた地形で、東は寺川〔万葉集〕にみえる倉橋川)に面し、対岸にやや広い平野を持つ。寺川に舌状に伸びる花崗岩風化土

奈良・上之宮遺跡

うえのみや

- 1 所在地 奈良県桜井市大字上之宮小字井田
- 2 調査期間 一九九〇年(平?)二月~四月
- 3 発掘機関 桜井市文化財協会
- 4 調査担当者 清水眞一
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 六~七世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上之宮遺跡は、桜井市の中心・桜井駅から南方約一・五km、寺川の左岸河岸段丘上に位置している。飛鳥から山田道を経て東国へぬ

の上に、東西約六〇~七〇m・南北約一〇〇mの範囲で、掘立柱建物・柵・石溝・素掘溝等が作られており、飛鳥時代初頭の居館遺構を構成している。海抜高は約一〇〇mである。

上之宮遺跡の発掘調査は、桜井南部特定土地区画整理事業にともなうもので、一九八六年一月から試掘調査を開始し、遺構群の検出にともない、今まで五次にわたる調査を実施した。

第五次調査の結果、四面庇付大型建物の西二〇mの、やや傾斜した低地から、直径六mの半円形の石溝が検出され、石溝に囲まれた内側から、長さ二・六m、幅一・五m、深さ一・五mの方形の石積み遺構が発見された。この方形石積み遺構の低い側(北東部)からは、排水溝状の石溝が北東側にのび、第一次調査で検出していた石溝につながる事がわかった。つまり、半円形の外護状石溝をとまなう方形石積み遺構があり、その排水溝が約五〇m北まで伸びていたわけで、まさに園池遺構と呼ぶべき特殊な庭園が作られていたといえる。すなわち、上之宮遺跡の六世紀末~七世紀初頭期には、主殿とみられる四面庇付大型掘立柱建物、脇殿とみられる東西棟の長廊建物、そして庭園遺構・祭祀遺構、それらを取り囲む柵列や門状遺構がそろっており、格式の上からも、規模・構造の上からも、貴族の邸宅としておかしくないと考えられる。

出土遺物の量は多く、整理用コンテナに約一五〇箱ほど出ている。内容的には須恵器・土師器が大半を占めるが、石積み遺構や石溝か

ら木片・木製品も数多く出土した。主なものに、横櫛・糸巻・斎串形・琴柱形・刀子形・鳥形等の木製品、ベッコウ片等とともに、松明とみられる焦げつきの残る棒状製品が多い。また、遺跡全体から桃核が出土しており、クルミ・クリ・ウメ・ウリ・コメ・ヒョウタン等の食用植物の核・皮等が石積み遺構や石溝から出土している。園池遺構埋没後に、多量の土器がその上に棄てられているが、その中には、ガラス玉錐型・ルツボ・ガラス滓があり、付近にガラス工房のあったことが推定できる。

8 木簡の積文・内容

- (1) 別^{〔金カ〕}□塗銀□其項□頭刀十口

160

木簡は、石積み遺構内の、底より二〇cmまでの泥をすべて持ち帰り、水洗した結果、八片に別れた状態で検出した。奈良国立文化財研究所の橋本義則氏により、すべて接合することが判明した。一二



文字のうち三文字が解読しにくいのが、二番目は「金」かとみられる。木簡は、明らかに削り取った破片で、この左右にも文章が存在したことは、両側に墨痕がみられることから推定できる。おそらく、前に何かの文章、たとえば刀に関する文章があり、それにひきつづいて「別に、金塗銀纏(?)で、其項(?)が□頭の刀を十本」等の意味を持つ木簡ではなからうか。全長一八三mm・幅一八mm・厚み二mmである。

なお、木簡積文は、京都教育大学和田萃氏の積読に、補足させていただいた。

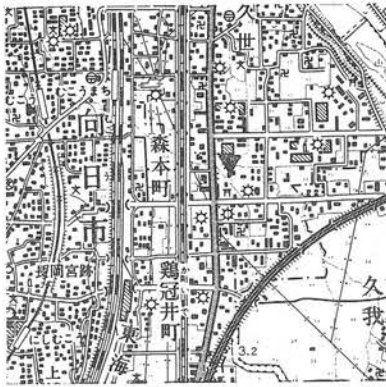
9 関係文献

桜井市文化財協会『上之宮遺跡第五次調査概報』(一九九〇年)

(清水真二)

京都・長岡京跡(3)

- 1 所在地 京都市南区久世東土川町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)九月～一九八九年二月
- 3 発掘機関 勸京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 百瀬正恒・長宗繁一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 八世紀末
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

発掘調査した地点は長岡京の左京一条三坊六町・十一町に推定され、東三坊坊間小路の検出が予想された。また、中世の戌亥遺跡の範囲に含まれ、弥生から古墳時代の東土川遺跡に隣接していた。調査は公共下水道工事に関連する地下水槽の建設に伴い、約二七〇〇㎡を調査した。なお、調査は左京第二〇三次調査で、地区名は7ANVMKである。

調査の結果弥生時代から中世の各時代の遺構を検出した。八世紀末の遺構は流路(SD五〇)・建物(SB三四)・柵列(SA二五〇)だけで、遺構の密度が低い。

SB三四一掘立柱建物は桁行三間以上、梁間が一間の南北棟建物である。柱間は、桁行二・五m、梁間三・三mに復元できる。SA二五〇柵列は、柱穴を四基検出し、柱間は二・二m等間であった。また、北西部で検出した弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が出土するSD五〇〇流路の上層は八世紀末に整地されている。その他、弥生時代後期から古墳時代後期の隅丸方形の竪穴住居二棟、溝・柱穴を多数検出した。

木簡の出土したSD五〇は時代によって規模を変え、古墳時代から平安時代まで継続する。八世紀末は南流し、トレンチ内で南東に向きを変えている。検出した規模は幅一五m以上、深さは一・〇～一・六mで西肩沿いが深く、東部は浅い。延長五五m検出した。

SD五〇の堆積土層は地点によって異なるが、木簡が多量に出土した北部では第一層が灰色泥砂層で、平安時代の堆積層、第二層は暗灰色泥砂層で、八世紀末の木簡・土器などの遺物を含む。第三層は暗灰色泥砂層と灰色砂層が互層に堆積する土層で、斎串などの木製品と飛鳥時代から奈良時代前半の遺物を少量含む。第四層は灰色砂礫層で、古墳時代前期から後期の土器を含む。

SD五〇からは木簡が約三〇〇点、削屑が三五〇〇点以上出土し

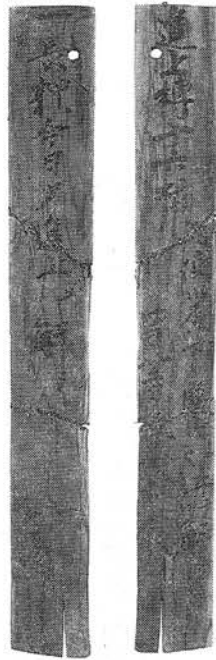
た。出土地点には片寄りがあり、大半は西肩の三箇所
の地点（南から第一・第二・第三）からまとまって出
土したが、流路の中央部や東部からの出土は少い。

木簡を中心とする出土遺物は各地点で内容に差が
あり、第一地点からは木簡とその削屑が多量に出土
し、削屑と木簡を一括して肩口から廃棄した状況が
うかがえる。土器類などその他の遺物は極めて少か
った。第二地点からは、少量の木簡と多量の箸など
の木製品、栗・茄子などの食物の種子が出土した。
第三地点からは土師器・須恵器などの土器類、木製
品に混在して木簡が出土した。南部の第一地点の底
は、八世紀末に他の地点に比べ深く掘り下げられて
おり、墨書人面土器・和同開珎など祭祀に用いられ
た遺物が出土した。木簡は三地点とも完形のもの
は少く、先端が焼けたり、二次的に半割したものが多
い。

その他、「西曹乙麻呂」「食一」などの墨書土器が
ある。「西曹」の土器は数点あるが、いずれも針書
きをした上に墨書をしている。



(13)



(2)



(1)

8 木簡の積文・内容

- (1) ・「○進上樽十六村 附使川原万呂進上如件以解
『請』(朱書)
」
・「○ 四月廿二日板茂千依
『少 志』(朱書)
」
379×23×4 011
- (2) ・「○進上樽十六村 附使川原万呂進上如件以解
『請』(朱書) 四月廿二日板茂千依
『少 志』(朱書)
」
・「○一長押以今日夕進上以解
」
302×40×3 011
- (3) ・「○進上樽十六村 附使的乙公進上如件以解
五月十八日板茂千依
『請』(朱書) 『少 志』(朱書)
」
350×35×3 011
- (4) 樽十六×
(101)×(21)×1 081
- (5) ・「廿六日進物
廣湍□足 □ □ 川合乙人鑿
矢作廣千万呂 □ □ □寸□倉 鑿七十
」
・「廿七日進物
□寸□倉 矢作廣□万呂 川合乙上
川合乙人 廣湍□足 五人□
(238)×28×2 019
- (6) ×進物 □ □ □ □ □四尺
□ □ □ 川合乙人 鑿五十
穿
(154)×20×3 081
- (7) ・□ □ 川合乙人五十切穿
穿
」
・□河内万呂
」
(110)×22×3 019
- (8) □漆常陸万呂 鑿七十
」
(126)×12×2 019
- (9) ・「東廐蕪荊合五人 宅守 宅万呂 大海
主 □万呂
」
・「 七月十三日 □廣□○
」
250×24×3 011
- (10) ・×兵衛府 □ □ □ □
・×月廿九 □ □ □
」
(122)×12×2 059
- (11) 「近衛府所」
」
625×35 061
- (12) ・×務省判
」
・加賀采女道公□刀自女
久米采女久米直飯成女
女孺從八位下 □ □ □ □ □ □ □ □
(190)×28×4 019

- (13) □酒人内親王所
091
・「督曹司 請錢伍拾文 買食座料」
「七月廿七日御使当繼」
315×40×6 011
- (14) 「田中□万呂
船国守
『五』
五月廿六日
(123)×18×2 059
- (15) 「着到
『五』
五月廿六日
(123)×18×2 059
- (16) 「着到石川家守□月九日□」
183×24×4 011
- (17) □九丈受字□案主 仕丁
京□]
(120)×41×4 019
- (18) 五人東南門 秦上麻呂
091
- (19) 「内豎舍人〔矢カ〕□田部伯□□舍人□」
309×14×8 051
- (20) 「▽鹿穴乾▽」
72×12×5 031
- (21) 「▽鴛老翼一籠▽」
121×15×3 031
- (22) ・「氷繼益 丸子楮万呂
矢作廣千万呂
」
155×63×11 065
- (23) 「 〇〇 〇〇]」
153×40×3 011
丸子楮万呂
091
- (24) ・「 〇〇〇〇〇〇]」
正六位上行少尉紀朝臣
〇〇〇〇〇〇
305×21×3 011
- (25) 「 藤原岡繼 守山王
〇〇 〇〇]」
194×13×2 011
- (26) 「 留
蘇原久矢女」
214×27×4 061
- (27) □□□
采女朝臣牧万呂 〔位上カ〕
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
091
- (28) ・「授 大和長□ □□
田使 大和長官神王
□□ □□ □□ □□]」
- ・「 □□ □□
人人人人人人
太政官誠忌忌忌
人忌忌忌忌忌
」
155×63×11 065

(29) ・「道道道道道道道道道」

道道道

・「道道道道道道道道道」

298×29×1 011

S D五〇は調査地北西部の久世中学校の構内で検出されている流路の延長部と推定される。この調査では、杭を多量に使用した北西から南東方向の東岸の護岸跡が検出され、流路の流れを南北方向に変えている。今回の調査では、流路の西岸を確認した。

左京一条三坊六町内では第三六次調査で二間×七間の東西棟の建物が検出されており、今回の成果と合わせると建物遺構は南部に中心がある。北部はS D五〇〇流路の上面を整地していることなどから広い空間地を確保したことがわかる。

八世紀末の遺跡の性格は、多量の木簡とその削屑の整理を待たねばならないが、東部に大規模な流路があり、樽など材木関係の木簡の存在、多様な役所名・人名（判読可能な削屑の三〇%以上が人名）などから長岡京の造営に伴う材木など物資の陸揚げ地や集積場、またその加工場と考えられる。しかし、全文の積文作成と整理の後に結論をだしたい。

なお木簡(1)(2)(3)の朱書は、隣接の行の上に加えられているものがある。

積文の作成には木村捷三郎・杉山信三・村井康彦・鬼頭清明の各

氏に協力していただいた他、左記の人々の参加による研究会を組織し作業にあたった。中山修一・井上満郎・橋本義則・館野和己・西山良平・吉川真司・山中 章・清水みき・土橋 誠

9 関係文献

六勝寺研究会『大蔵遺跡発掘調査報告』(一九七三年)

(百瀬正恒)

神奈川県立埋蔵文化財センター編

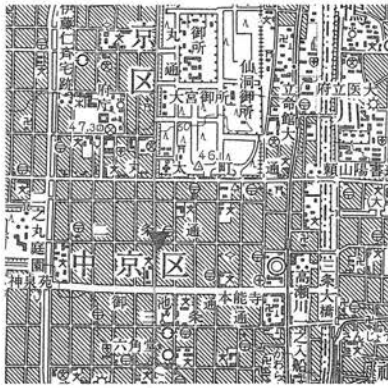
『宮久保遺跡Ⅲ』—神奈川県立埋蔵文化財センター

調査報告15—

『木簡研究』六号に紹介され、天平五年の年紀と「郡稻長」などの記載で注目された木簡が出土した宮久保遺跡の正報告書で、奈良・平安時代篇にあたる。遺構・遺物の詳細な解説がある。

B 5判、本文篇八四四頁、図版篇二九〇頁、付図一五枚。

神奈川県立埋蔵文化財センター 一九九〇年三月刊行。



(京都東北部)

部に位置しており、今回の調査面積は一九六㎡である。調査地北部は二条大路南築地推定ラインを含む。文献史料から、当十六町は、平安時代前半には小二条殿と称された邸宅が、また、平安時代後期には藤原顕頼邸が存在していたと推定されている。調査の結果、古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物を

京都・平安京左京三条三坊十六町

- 1 所在地 京都市中京区烏丸通二条下る秋野々町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)四月～七月
- 3 発掘機関 勅京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 小森俊寛・長戸満男
- 5 遺跡の種類 都城跡・都市(町屋)跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平安時代においては平安京左京三条三坊十六町の北部に位置しており、今回の調査面積は一九六㎡である。調査地北部

多数検出した。

残念ながら、平安時代に比定しうる明確な遺構は、後期の井戸を一基検出したにとどまる。しかし、平安時代前期から中期の遺物も、中国越州窯産の青磁や、緑釉・灰釉陶器など当時の高級品を含む遺物が混入品としてではあるが出土しており、当町に平安時代を通じて階層の高い人々が生活していたことを示す資料といえよう。平安時代の二条大路関係の遺構は検出していないが、ほぼ重なる位置で室町時代後期の二条通り南側溝と見られる東西溝二条を検出した。

このほか中世・近世の各期の遺構も多数検出している。加えて各時代の出土遺物の中には類例のごく少い貴重な資料も含まれており、遺物の面での成果も大きい。

木簡の出土した遺構は、南北が約四m、東西は東肩が不明だが検出部分で四m強、深さが検出面から一・五m程あり、平面が矩形を呈すると推定できる遺構である。西・南・北の各肩壁は、横板があらわれ、杭で止められていた。性格は堆積土やその状況、また、横板・杭が肩部の簡単な崩れ止めと見られることなどから溜水施設的な池状の遺構と考えている。後にゴミ捨て穴に転用されるようである。桃山時代につくられ、埋没は江戸時代初頭に下る。

この遺構からは、木簡のほかに土器・陶磁器類、瓦類、木製品、金属製品、自然遺物など各種の遺物が出土した。土器・陶磁器類では、土師器焙烙・塩壺、国産の施釉陶磁器碗・皿・壺・茶碗・向付

・焼締陶磁器播鉢・甕・壺、中国明末の染付碗・皿など、近世初頭の洛中の遺跡から一般的によく出土する日常雑器・茶陶類や、赤織部沓茶碗、京焼軟質施釉陶器碗など比較的例の少ない資料も出土している。その他、漆器碗・塗箸・塗櫛・人形・打球・篋・刷毛・小型曲物（漆桶か）・小壺・箱・桶・塗下駄などの木製品や、和鉢・二股の引掛け金具・すっぽんの甲羅・ほたて貝など興味ある各種の資料が多数含まれている。これらの遺物は当地の遺跡の理解にとって必要であるということにとどまらず、同期の日常生活や文化の理解を深めるうえで重要な資料となろう。

8 木簡の积文・内容

(1) ・

可被右衛門
[地珂カ]



219×36×2 032

(2) ・

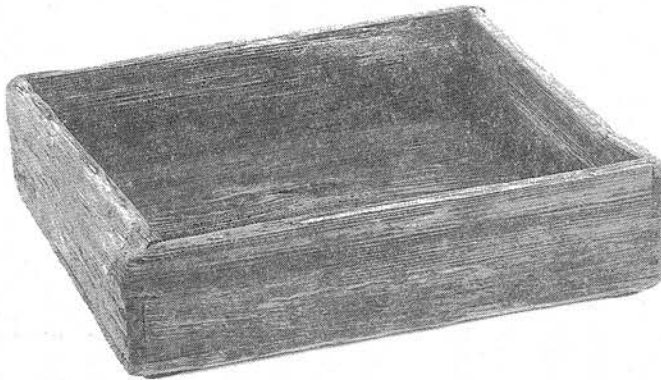
(167)×21×4 039

(3)  [実カ]
[重]

366×322×102 061

木簡五点、削屑一点、墨書木製品二点、合計八点の文字資料が出土しているが、墨痕や欠損の状態などから判読できた三点をあげた。ほかに屋号様の印を彫り込み上部に墨書した木簡が一点出土してい

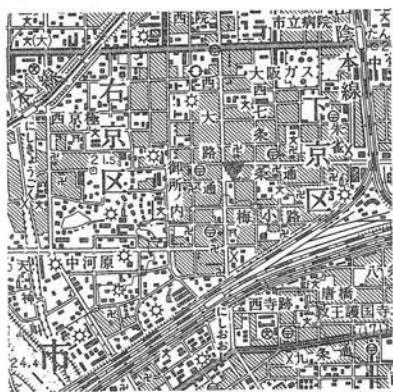
る。(3)は完形の箱の側板外面中央にある墨書であり、人名であろうと考えている。この箱は内面に漆塗りの痕跡が残り、底下面には高さ9mm程の小さな足が四隅に付いている。用途は明らかではないが興味のある木製品である。
(長戸満男)



木箱 (3)

京都・平安京西市外町

- 1 所在地 京都市下京区西七条南西野町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)一月～一九八八年二月
- 3 発掘機関 勅京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 菅田 薫
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

本調査地は、平安京右京八条二坊八町のほぼ中央に位置し、平安京西市外町に推定される場所である。西市の調査では、一九七七年地下共同埋設溝の建設に伴う発掘調査が実施され、木簡の出土が報告されている。今回の調査は、マンシヨン建設に伴う発掘調査であり、調査区は、基礎掘削の範囲に限られた。調査地の層序は一〇層に大別でき、古墳時代から江

戸時代にわたって遺構・遺物を確認した。このうち、第七層から第九層までが平安時代の整地層で、第七層からは一〇世紀前半、第八・九層からは、九世紀前半の遺物が出土した。また、板・杭などで粗く護岸した南北方向の溝と、この溝に直角に交わる東西方向の溝を検出し、西市外町の区画溝と推定される。

木簡は四点で、第八層より、多量の土師器・緑釉陶器などの土器類及び多数の木製品とともに出土している。

8 木簡の積文・内容

(1) 「<油一升御明料」

91×18×3 033

(2) □□□□

(66)×20×3 019

(3) ・「坂上殿□取」
〔東カ〕

(題籤軸)

(78)×35×5 061

(4) ・「□職

□鳥鳥□職職式式」
〔鳥カ〕

・「□□成成成□□」

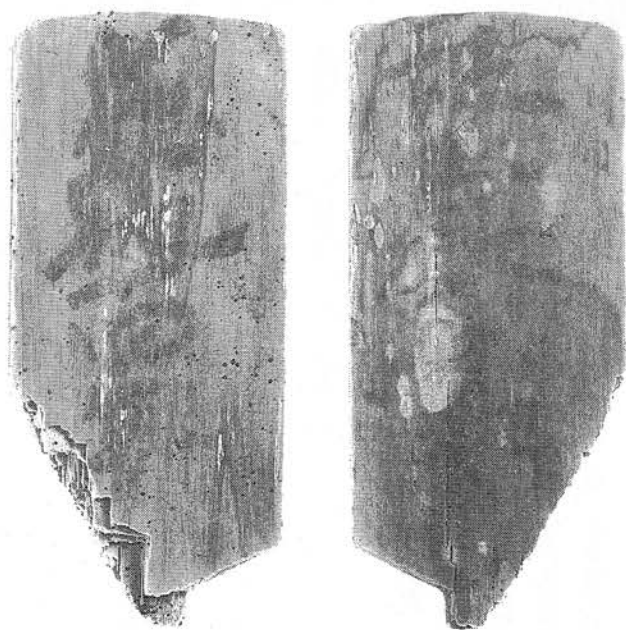
304×33×5 065

(3)は題籤軸である。裏の「十四年」の上は年号かどうか判然としない。(4)の表面には黒漆が塗布されている。笏あるいは扇の未成品などの可能性が考えられる。

京都市文化観光局・勲京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報 昭和六三年度』(一九八九年)

木簡学会『木簡研究』創刊号(一九七九年)

(菅田 薫)



木簡(3)

木簡研究 第一号

巻頭言

狩野 久

一九八八年出土の木簡

- 概要 平城京跡 平城京左京二条二坊十一・十四坪坪境小路跡 平城京左京二条四坊二坪 東大寺大仏殿廻廊西地区 藤原宮跡 藤原京跡 長岡宮・京跡 長岡京跡 嵯峨院跡(史跡大覚寺御所跡) 大坂城跡 東郷遺跡 吉田南遺跡 小丸遺跡 姫路城跡(武家屋敷跡) 姫路城跡(東部中濠) 玉手遺跡 袴狭遺跡 山の神遺跡 池ヶ谷遺跡 瀬名遺跡 居村B遺跡 今小路西遺跡(福祉センター用地) 中里遺跡 中江田本郷遺跡 高溝遺跡 狐塚遺跡 仙台城二の丸跡 熊野田遺跡 一乗谷朝倉氏遺跡 三小牛ハバ遺跡 能登国分寺跡 発久遺跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡(GD01地点) 紺屋町遺跡 下川津遺跡
- 一九七七年以前の木簡(一一)
- 出雲国庁跡
- 中国出土簡牘的保護研究
- 中国出土木・竹簡の保存科学的研究(抄訳) 訳・佐川正敏
- 木箱と文書 小池伸彦
- 所謂『長屋王家木簡』の再検討 大山誠一
- 有韻尾字による固有名詞の表記 犬飼 隆

彙報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円



(大江山・舞鶴)

遺跡の立地は、西に開く谷幅五〇m、奥行九〇mの小規模な谷間の水田地で、標高六m前後を測る。遺跡背後の山上には、中世城郭池田谷城跡があり、それから西方へのびる遺跡を挟む尾根上にも、いくつかの城郭が確認されている。

- 1 所在地 京都府舞鶴市字久田美小字細工ヶ下
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一月～二月
- 3 発掘機関 舞鶴市教育委員会
- 4 調査担当者 吉岡博之
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 久田美遺跡は、舞鶴市の西部を北へ貫流する由良川の河口から、約一二km上流の右岸山裾に位置している。

京都・久田美遺跡

久田美遺跡の調査は、圃場整備事業に伴う確認調査で、舞鶴市教育委員会が一九八九年度国庫補助事業として実施したものである。調査の結果、谷部に設定した八×一〇・五mの調査地で、積石遺構、溝状遺構、掘立柱建物等を検出したほか、九層の遺物包含層を確認でき、低湿地のため柱根や木製品等が良好に遺存していた。

木簡が出土したのは、積石遺構のベースをなす堆積層の第七・八層と、全ての遺構が埋没した後に堆積した第三層の上部層である。

第七・八層は、有機物を多く含む泥土層で、木簡二点、舟形代、ノコギリ状木製品、火鑽臼、木球、横櫛、椀、箸、草履状木製品、下駄、縄といった木製品や、土師皿、瓦器(釜、鍋、鉢、碗)、須恵質鉢(東海系か)、土錘、石鍋転用石製品(護符か)等の遺物のほか、多くの獣骨(ウシ・ウマの下顎骨、前・後足各部位等)が出土した。時期は、一三世紀後半～一五世紀前半に比定される。

第三層上部層からは、木簡五点、寛永通宝等が出土し、木簡は一八世紀後半頃に比定される。

8 木簡の积文・内容

- (1)  270×31×4 051
- (2)  136×25×6 032
- (3)  162×33×9 011


(4) ・「細工下町畑后行」

・「よろすや」

208×29×11 051

(5) 「」

190×33×8 051

(6) ・「とら」



・「寅三月吉日 仲右衛門」

162×27×4 051

(7) ・

「壱升七合」

・「三月吉日仲右衛門」

155×29×4 051

(1)は呪符で、大日如来を表わす梵字「バン」をおき、次に「山八戸」といった符籙、鬼神を表わす星「口」を三個、七鬼神を表わす七個の目とそれらを縦にむすぶ線と「口」を五個、その下に「口」を三個、そして「戸戸戸」、次に「噫々如律令」と書き、さらに「五行」の星形をおいておわる。この呪符は「七目符」といわれるもので、疫病祓いのため門前に立てたものと推定される(奈良大学水野正好氏のご教示による)。(2)も呪符の可能性が強く、判読不能の記号様の墨書がある。(3)~(7)は江戸時代のもので、(4)の「細工下」は調査地点の小字であり、

(6)(7)の「仲右衛門」は土地所有者に伝わる家号である。また、(3)(7)の「七升」「壱升七合」等の上に記された文字は判読できなかったが、あるいは米などの穀物種名の可能性がある。いずれにしても紙の普及していた時代に、木札を使用していることから、その用途の特殊性がうかがわれる。

今回出土した呪符の共伴遺物には、舟形代等、祭祀的性格をもつものが多いほか、獣骨類が目をひいた。獣骨は解体されて、前足、後足、顎などの単位で投棄されたとみられ、当時の動物利用をうかがう上で興味深い資料である(獣骨については、奈良国立文化財研究所松井章氏のご教示による)。

久田美遺跡の性格については、限られた区域での調査でもあり、不明な点も多く残されたが、現時点では、背後の城郭と何らかの関連をもつ遺跡としてとらえておきたい。なお、遺跡は不十分なが設計変更を行って保存されることとなった。

9 関係文献

舞鶴市教育委員会『久田美遺跡発掘調査概要』(一九九〇年)

(吉岡博之)



(1)

木簡研究 第一〇号

巻頭言——木簡学会の十年——

原 秀三郎

一九八七年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 興福寺勅使坊門跡下層 藤原宮跡 藤原京跡
藤原京左京九条三坊 紀寺跡 長岡宮跡 長岡宮・京跡 鳥羽離宮
跡 千代川遺跡 矢谷遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡(2) 梶原南遺跡
宅原遺跡(豊浦地区) 長田神社境内遺跡 書写坂本城跡 砂入遺
跡 杉垣内遺跡 清洲城下町遺跡 岩倉城遺跡 勝川遺跡 荻安賀
遺跡 山中遺跡 小町一丁目一〇七番地点遺跡 宮町遺跡 川田川
原田遺跡 光相寺遺跡 妙楽寺遺跡 釜淵遺跡 南古館遺跡 大楯
遺跡 手取清水遺跡 角谷遺跡 横江荘遺跡 白坏遺跡 草戸千軒
町遺跡 延行条里遺跡 長門国分寺跡 安養寺遺跡 金光寺跡推定
地 博多遺跡群(築港線関係第三次調査) 吉野ヶ里遺跡群 本告
牟田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(一〇)

平城宮跡(第四四次)

中世木簡の一形態——山札・茅札についての覚書——

石井 進

雲夢睡虎地秦墓竹簡「日書」より見た法と習俗

工藤元男

木簡の保存処理

沢田正昭

彙報

『木簡研究』六〜一〇号総目次

研究集会報告一覽

木簡出土遺跡報告書等目録

寺崎保広

木簡出土遺跡一覽

寺崎保広

頒価 三八〇〇円

〒四〇〇円

大阪・上清滝遺跡

かみきよたき

- 1 所在地 大阪府四條畷市清滝
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)一月〜一九九〇年三月
- 3 発掘機関 四條畷市教育委員会
- 4 調査担当者 野島 稔
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代末〜室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

上清滝遺跡は、生駒山系を横断する国道一六三号沿いの小集落と所々に旧清滝街道の名残りを見出す東西六〇〇m、南北一〇〇mの範囲に広がっている。一九八八年から、建設省の交通量増加に対する国道の線形改良代替工事に先がけ、発掘調査を実施した。その結果第二次調査(一九八八年)、第四次調査(一九八九年)において木簡が出土した。

一 第二次調査

遺跡のほぼ中央部に位置する小字名「塔ノ坊」とその周辺を対象として実施した。その結果、掘立柱建物をはじめ、石組井戸・素掘井戸・溝・落込み状遺構・旧河川等が検出された。木簡はこの旧河川の斜面に投棄された状態で発見された。

埋土中からは、木簡のほか、下駄・箸・漆器・金箔塗り光背・木製聖観音立像・人形等の木製品が非常に保存の良い状態で出土している。木製品以外の遺物は、瓦器碗・土師質皿・白磁・砥石・硯などがある。

二 第四次調査

遺跡の西端に位置する小字名「籠池」と呼ばれている水田地で実施した。その結果、掘立柱建物、溝、東西約三〇m・南北約二二m(約六六〇坪)の池等が検出された。木簡二点は、池の下樋にあたる二号木樋の集水施設の四本柱のうち、西側の二本に、墨書面を内側にして木釘で打ち付けられた状態で出土した。池の埋土中から瓦器碗・土師質皿が出土している。

8 木簡の积文・内容

一 第二次調査

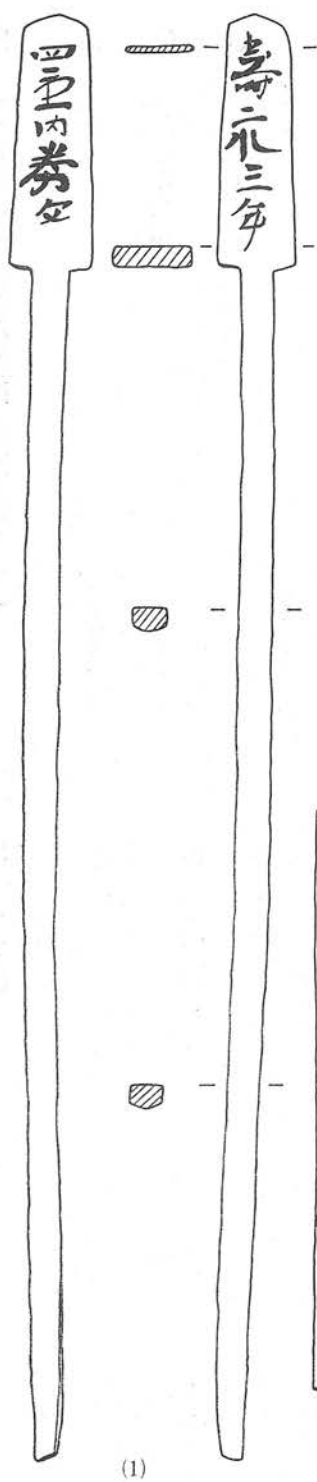
(1) ・「寿永三年」

・「四至内券文」

(題籤軸)

- (2) 「<妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」
272×17×1 032
- (3) 「常福方」
257×(25)×1 081
- (4) 「□せのたね」
103×22×3 051
- (5) 「<汝聴観音行善應」
「」
270×14×1 032
- (6) 鴛
念西方仏
出家請僧
(160)×73×6 065
- (7) 「慶喜四静属可」
慶喜四静属可」
「七八」^{〔因カ〕}
235×(13)×10 081
- (8) 「妙法蓮華経」
「」
(60)×13×3 019
- (9) 「○八月八日」
196×22×5 011
- (10) 「王将」
32×17×5 061

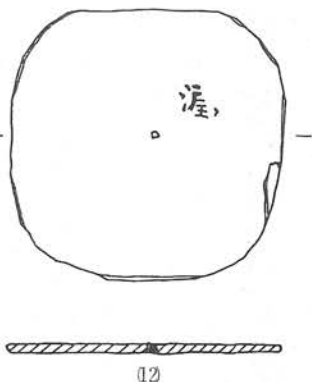
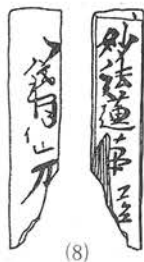
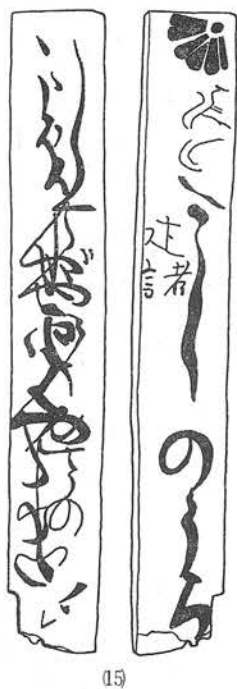
- (11) 「歩兵」
「」
31×12×1 061
- (12) 「渥○」
67×67×2 061
- (13) 「」
(355)×(17)×6 081
- (14) 「」
「」
(117)×13×2 059
- (15) 「(文様) のうち」
諸
(160)×23×5 019
- (16) 「」
(150)×(18)×1 081
- (17) 「」
「」
「」
84×(43)×3 032
- 二 第四次調査
- (1) 「咄天罡○一切一切吉祥句罪惡不」
559×28×6 051



第二次調査区で共伴する木製聖観音立像・光背・柿経等寺院関係遺物との関係は不明であるが、周辺の字名「観音堂」「仁王堂」等の地域が今後の発掘調査対象地であることから、寺院関係遺構が検出されると推定される。また、現在、第二次調査区で木簡が出土した旧河川の続きを第五次調査として発掘中であり、木簡が出土する可能性がある。

(村上 始・野島 稔)

(2) 「
咄天正。
一切□□□□□罪□一切□□
以□□□□□」
551×27×6 051





(17)



(4)



(14)



(16)



(2)



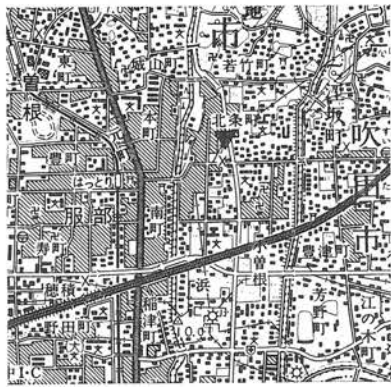
(6)



大阪・小曾根遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市北条町一丁目
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一月～六月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 森 幸三
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小曾根遺跡は豊中市の南部の天竺川・高川に挟まれた標高約四m前後の低地平野部に位置する。弥生時代から室町時代にかけての複



(大阪西北部)

合遺跡であり、また文治五年(一一八九)の「春日社領垂水西御牧榎坂郷田畠取帳」に当時の様子が記されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴い実施された小曾根遺跡第一五次調査で、弥生時代中期の竪穴式住居・壺

棺墓、平安時代末から鎌倉時代前半の掘立柱建物・木棺墓・井戸、室町時代の溝等が多量の土器・石器・木器などの遺物を伴い検出された。

木簡は井戸より出土した。井戸は直径一・五m、深さ一mを測り、井筒として直径五〇cm、高さ三五cmの二段積の曲物が底に据えられていた。掘形の形態から、井戸枠・井桁等が存在していた可能性も考えられる。木簡は曲物内埋土から一点、井戸を廃棄したと考えられる上部の埋土から二点出土した。木簡の他に「十」の墨書のある瓦器碗や甕片が出土しており、これらから一三世紀初頭頃には廃絶した井戸と考えられる。

8 木簡の积文・内容

(1) 「蘇民将来子孫宅也」

170×32×3 032

出土した木簡は三点とも同文であり、蘇民将来の名を記した呪符木簡である。おそらく同一人の筆になるものと思われる。隣接地で



行われた小曾根遺跡第七次調査でも、「蘇民将来□□□□」の木簡が出土しており、この集落において「蘇民将来」に関する信仰が根強いものであったと考えられる。

9 関係文献

木簡学会『木簡研究』四号（一九八二年）

（森 幸三）

兵庫県教育委員会編

『山垣遺跡―兵庫県文化財調査報告書第七五冊―』

一九八三年に調査され、出土した木簡の内容から、丹波国水上郡春部里に関わる遺跡と推定されている山垣遺跡の正報告書。二一点の木簡全点について、写真、実測図、釈文が掲載されている。

A4判、図版五九枚、本文八八頁、頒価一五〇〇円・送料

三一〇円、兵庫県教育委員会 一九九〇年三月刊行

申込先・兵庫県水上郡春日町黒井四九六の二

春日町歴史民俗資料館

TEL 〇七九五(七四)〇二二五

奈良国立文化財研究所編

『平城京 長屋王邸宅と木簡』

一九八六年から三年にわたって調査された平城京左京三条二坊及びその周辺の発掘調査概報。合せて一〇万点近くのものばかりと見られる「長屋王家木簡」と「二条大路木簡」等も収録され、遺構・遺物についての現段階での成果が報告されている。

B5判、カラー図版三二頁、本文一八八頁

定価二九〇〇円、吉川弘文館 一九九〇年二月刊行



兵庫・但馬国分寺跡

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町国分寺
- 2 調査期間 一九八九年(平一) 一月～二月
- 3 発掘機関 日高町教育委員会
- 4 調査担当者 加賀見省一
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

但馬国分寺跡は、但馬国のほぼ中央部にあたる円山川中流域左岸の小扇状地上に位置する。標高は、塔跡西南隅の礎石上で二五・三mを測る。

但馬国分寺跡の調査は、一九七三年に始まり、今回で一六次を数える。その結果、主要伽藍では、金堂と中門を回廊で結び、金堂の西に塔を配置していたことが判明した。また、寺域についても、西限が未確認で

あるものの、東限、南限については確認でき、ほぼ寺域の規模を推定することができる。

今回の調査は、町道の拡幅工事に伴う事前調査として行ったもので、金堂の北東に道路の拡幅計画に合わせて二m幅のトレンチを三本設定した。このうち、一番北側のトレンチにおいて、横板組隅柱どめの井戸を検出した。井戸は四辺を方位に合わせて造られており、規模は、内法一辺一七〇cmの正方形で、検出面から底部まで二七〇cmを測り、底面には礫を敷く。井戸枠の材は、土台と四隅の柱にヒノキ材を用い、側板にはスギ材を用いている。

井戸内の遺物は、大きく上層・中層・下層に分れて出土した。下層からは、土器(墨書土器を含む)、瓦の他、釣瓶や鑰、斎串、木簡等が出土した。下層の遺物は、出土土器の形式や、紀年木簡から八世紀後半のものと考えられる。中層では、多量の瓦片と斎串、鞍・鐙・手綱・目・口を墨で描いた馬形、土器片が出土した。上層からは、井戸の検出面で、軒丸瓦と一〇世紀代の須恵器一点が出土した。これらのことから、この井戸が八世紀の後半までに寺域の伽藍に合せて造られ、九世紀から一〇世紀にかけての段階で廃棄され、埋められたものと思われる。

但馬国分寺跡では、今回の井戸を含め四箇所の井戸を検出しているが、今回のものは規模、構造的にも優れており、また金堂、講堂(推定)に隣接していること、墨書土器中に「大院」と記したものが

含まれること等から、国分寺内の重要な区画に付属した井戸であったと考えられる。

8 木簡の積文・内容

- (1) 「造寺料収納帳」
 ・「宝亀三年四年 (題籤軸)」
 借用帳 (54) × 26 × 5 061
 - (2) 供料六斗 『飛飛飛飛 司』合一石三斗八升五合
 『飛』雜料七斗八升五合『飛』『月月月月』
 (408) × 32 × 19 019
 - (3) □僧一人 (62) × (27) × 3 081
 - (4) 光□ (50) × (15) × 3 081
 - (5) 「国南国」
 ・「□元」 422 × 61 × 4 011
 - (6) 「□人□四 朝□四^{〔来カ〕}人□□四人出石五養父五」
 356 × 23 × 3 011
- 木簡の積読にあたっては、奈良国立文化財研究所史料調査室の方の御教示を得た。

(加賀見省一)



第16次調査位置図



兵庫・砂入遺跡^{すないり}

- 1 所在地 兵庫県出石郡出石町袴狭字持網
- 2 調査期間 一九九〇年(平二)一月～三月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 渡辺 昇・久保弘幸
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 八～九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、出石町と豊岡市の境界近くに位置し、北側を流れる小野川の旧河道もしくはその支流の河道に相当するものと思われる。調

査は一九八八年にも行われ、二点の木簡と五点の墨書土器が出土している。今回はその西側約二〇〇m²を対象として全面調査を実施した。谷南側の袴狭遺跡とは約五〇〇m隔っているが、関連の深い遺跡である。遺跡周辺は、円山川河口から

約二km上流になるが、標高六～八mと低く、湿地化しており、調査の結果でも常に河川の氾濫にあっていたことが窺われる。

今回の調査では、木簡は一点だけである。また未整理段階ではあるが墨書土器も一点しか出土していない。木簡が一点のみで硯などの遺物も出土していないことは、遺跡の性格を示すものかと思われる。

今年度調査による遺構は、大別して二面あり、上層では自然流路横に祭祀に伴う道を作っている。幅三～五mの粗朶敷きの道で、道の上に人形、斎串を埋納した土坑を有している。下層では自然の流路を使って祭祀を行っており、多量の人形、馬形、斎串をはじめ刀形・刀子形・鋤形・剣形・舟形などの祭祀遺物が約二万点以上出土している。木製遺物の多さに比べて木簡が少く、出土遺構が上層の道状遺構横の自然流路であることから、今回調査した遺構に伴うものではないかもしれない。

8 木簡の積文・内容

(1) □右□禁□

(117)×28×3 081

上下ともに折れている断片である。文意も明確でなく、五文字の存在が明らかになっただけである。

(渡辺 昇)

兵庫・嶋しま遺跡

- 1 所在地 兵庫県出石郡出石町嶋字法安寺
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一二月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 渡辺 昇・久保弘幸
- 5 遺跡の種類 散布地
- 6 遺跡の年代 九一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(出石)

遺跡は、一九八八年以降調査が行われ、多量の人形・馬形・齋串などの祭祀遺物と六点の木簡を出土している。袴狭遺跡の下流に位置している。袴狭川と入佐川の合流点の西側で、さらに一五〇m余りで出石川に注ぎ込む地点である。遺跡周辺は、河口から約二一km上流に位置しているにもかかわらず、標高六m前後と非常に低く、湿地化している。調査結果でも多量の土砂が

流入しており、常に氾濫にあってきたようである。調査は、小野川放水路計画に伴う事業の確認調査として行われたものである。旧河道の一部を確認したものの、明確な遺構はなく、周辺の祭祀遺跡(砂入・袴狭・田多地・小谷)のように多量の遺物も出土していない。四世紀の古式土師器が大半で、齋串二点が出土している。木簡は祭祀遺物出土層より上から出土していることから、齋串の時期よりも下る可能性が高いと思われるが、断定できない。今後も調査が行われるので、その際に時代決定できることを期待したい。

8 木簡の積文・内容

(1) 「令給

(167)×18×2 019

出土遺物が少く、木簡も一点で十分な検討を加えるまでには至っていない。周辺の袴狭遺跡、砂入遺跡などとの関連を考える必要があるかと思われる。本遺跡そのものに木簡に伴う遺構が存在する可能性は非常に薄いものと思われる。内容的にも祭祀色の弱いことから、流されたものと推定される。

(渡辺 昇)



兵庫・山国やまくに・源ヶ坂げんがさか遺跡

- 1 所在地 兵庫県加東郡社町山国
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)五月～一〇月
- 3 発掘機関 加東郡教育委員会
- 4 調査担当者 森下大輔
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代中期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山国・源ヶ坂遺跡は、中国自動車道滝野社インターチェンジから国道一七五号線沿いに約2km南下したところに位置している。

遺跡は加古川によって形成された標高約七〇mの中位段丘面上に立地し、東を比高約二〇mの高位段丘面、西を比高二〇mの低位段丘面によって決定され、北は段丘面を開析してできた小河川(下川)、南は中位段丘面に形成された谷部によつ

て決定されている。遺跡の範囲は、東西二〇〇m、南北一五〇m前後、約三万㎡の規模をもつと考えられる。

谷を隔てて北側には、式内社である佐保神社が鎮座している。当地は元徳二年(一三三〇)には、福田保に属していたことが「播磨清水寺文書」から窺える。

県営圃場整備に先立つ遺跡確認調査によって発見された遺跡で、段丘面の落差などの関係から、設計変更の不可能であった約六〇〇㎡を調査した。その結果、竪穴住居一一棟、建物約四〇棟のほか、溝、土坑、井戸などを検出している。时期的には平安時代前半の遺構が検出されていないものの、古墳時代から室町時代に至るほぼ全時期の遺構がみられる。下川の源流となる下藤池からの水路建設により、この段丘面の利水が可能となった時期に、集落そのものが高位段丘面に移った可能性が考えられ、遺跡としては発展的に消滅したのではないかと考えている。

木簡が出土した地点は、段丘面がわずかに窪む谷部の起点となるところに掘り込まれた東西五・八m、南北五m、深さ五〇cmを測るやや角張った円形の土坑で、断面はU字状を呈している。埋土は大きく二層からなり、木簡は下層のシルトから二点が出土している。共伴遺物には、方形の合板で作った折敷、須恵器の山茶碗・皿・播鉢・捏鉢、土師器の土塙・羽釜・皿などがわずかにみられる程度である。

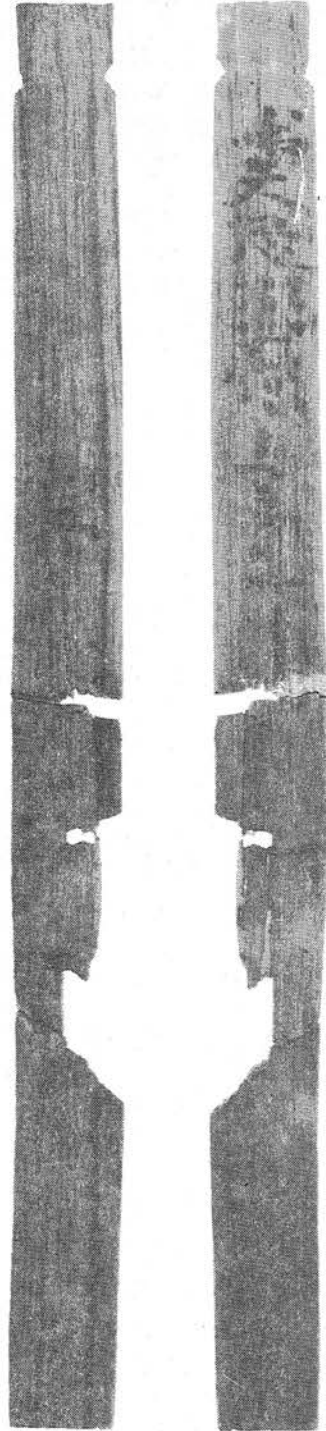
8 木筒の積文・内容

(1) ・「く咄天正(符籙) 三々□□□□」

・「く」

二々

215×16×2 032



切り込み部分に紐が巻かれていたような痕跡が看取されるところから、二枚一組で使用された可能性が考えられる。また、土坑出土の木製品が木筒と折敷のみであるところから、折敷そのものも呪符に関連したものと見える。木筒はもう一点出土しているが、切り込み部分の断片にすぎず、形状すら把握することはできない。

出土遺物が少く時期を決定することは困難であるが、とりあえず一三〜一四世紀代として幅をもたせておくことにする。

(森下大輔)



(北条)

上滝野・宮ノ前遺跡は、中国自動車道滝野社インターチェンジから国道一七五号線に沿って一・五km北上した五峰山麓に位置している。県下最大の流域面積をもつ加古川が急峻な山間部を南流してきたのち、瀬戸内海に至るまでの緩やかな平野部をぬって流れだす起点となるのが、五峰山・鳴尾

兵庫・上滝野・宮ノ前遺跡

かみたきのみやまえ

- 1 所在地 兵庫県加東郡滝野町上滝野
- 2 調査期間 第一次調査 一九八九年(平一)一月～二月
第二次調査 一九八九年七月～九月
- 3 発掘機関 加東郡教育委員会
- 4 調査担当者 森下大輔
- 5 遺跡の種類 集落跡か
- 6 遺跡の年代 九世紀～一世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山を抜け出したこの付近である。

遺跡は、加古川右岸の五峰山山麓に形成された中位段丘面が丁度三日月のように弧を描いて湾曲した、その崖下に形成された沖積平野に位置している。範囲としては、北には中位段丘面がそそり立ち西は五峰山が開析されてできた仁王谷と呼ばれている谷間からの土砂によって形成された緩扇状地によって決定される。東・南方方向では、沖積平野がJ R加古川線付近まで徐々に低くなり、この付近に後背湿地を形成して終わる。遺構が存在すると推定される規模は、東西約一五〇m、南北約五〇mである。

周辺部の遺跡としては、五峰山山頂に重要文化財の白鳳仏である銅造阿弥陀仏を祀る密教寺院の光明寺がある。この地は、足利直義と足利尊氏・高師直が観応二年(二三五二)に争った光明寺合戦の舞台としても有名なところである。滝野町から西脇市域にかけては、奈良時代から平安時代を通じて約二〇〇基の窯跡からなる東播北部古窯址群が広がっている。そのほか三面庇の建物跡が検出されている下ノ山遺跡などが知られている。

この遺跡の中心部と考えられる部分には、春日神社が建立されており、調査当初は藤原行成の日記『権記』の長保元年(九九九)八月条に、莊司補任についての記載が見られる勸学院領の荘園「滝野荘」を想定していた。

一九八九年夏の調査によって、遺跡推定地の西端部を調査し、建

物(二間×三間)一棟、柵列一条を検出した。この調査によって、遺跡の西限は決定されたものと理解している。しかし、生活跡と考えられる部分のうち、もっぱら東・南に広がる低湿地を南に向かって調査したため、検出された遺構としては、東西および南北に延びる道状遺構のほか、土層の堆積状態から水田と考えられる部分が見られる程度である。東西に延びる道状遺構は、幅約2mで東端部では小礫を敷き詰めたような形状を示している。南北に延びる道状遺構は、N—35—Eとして区画されている現在の条里型地割の直下で確認されたもので、幅約三・五mを測る。現時点ではこの道状遺構を遺跡の幹線道路ではないかと想像している。遺物は、この道状遺構の周辺部に集中して出土する傾向がみられる。

遺物は現在整理中であるが、須恵器の坏蓋が非常に多く、そのほか壺・甕・風字硯・稜碗などがみられる。土師器も坏蓋が最も多く、甕・製塩土器などもみられる。また、銅製で黒漆を塗った帯先金具も出土している。そのほか、祭祀に関するのだろうか、手斧や獣骨なども検出している。

須恵器の坏蓋には、墨書土器・転用硯・漆容器などがみられる。墨書土器としては二〇〇余点を確認しており、庄・岡西・岡東・小岡・三西・下東・佐布・下古川・門家・中家・小家・井額・西山本・兵部省(兵・兵部・省)・後中・豊・山依・財部中殿・調□・三部・山田・奈良・京といった文字を読み取ることができるとは、魚を意

匠したものもみられる。そのほか土師器の坏身には焼成前に夫・□
 □三野阿と線刻されたものもみられる。

木器としては盤・折敷・曲物を中心に、人形・馬形・櫛・下駄・櫛の子・建築部材などが出土している。

木簡の形態をしているものが一点出土し、そのうち墨書のあるものは六点である。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「伊□ (55)×38×4 081
- (2) 「<上郷□ (96)×23×5 039
- (3) 「<□□ (93)×28×5 039
- (4) ×人掠人等□^{〔等カ〕} (101)×20×5 081
- (5) 郷〔久米〕 日下部□□日 六人部
 □人□□□ □□ 日下部
- (6) □□ (176)×28×4 081
 □□ (135)×27×3 019

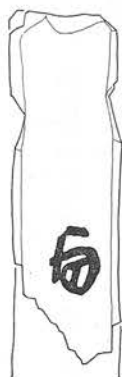
木簡の意味については判然としていないのが実状である。総じて



木簡(4)



木簡(1)



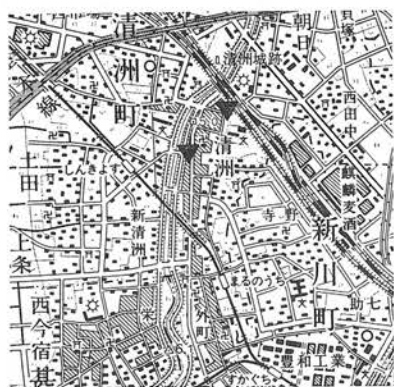
木簡(3)

墨書の遺存が良いとはいえず、とくに(4)は墨が剝落し、墨痕が浮き上がった状態のものである。

これら遺物からみれば、非常に官衙的性格をもった遺跡であることは否定できない。郡域からみればあまりにも辺境の地にあたり、郡衙とするには難がありそうである。その下級の郷・里といった単位のものを想定することが望ましいのであろうか。諸氏のご指導を仰ぎたい。

なお、木簡判読に際しては、奈良国立文化財研究所寺崎保広氏の御教示を得た。

(森下大輔)



(名古屋北部)

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川の中流域に広がる

自然堤防上に展開する。清

須城は一五世紀末以降、尾

張地方の政治的中心地の一

つであり、織田信長・信雄

・豊臣秀次などの有力者が

入城している。遺跡は古墳

時代後期から集落として存

続し、清洲城廃城後も清須

宿の宿場町が営まれていた。

愛知・清洲城下町遺跡

きよす

1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間 一九八八年(昭63)四月～一九九〇年三月

3 発掘機関 財愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 水谷朋和・梅本博志・小澤一弘・川井啓介・

鈴木正貴・加藤とよ江

5 遺跡の種類 集落跡・城館跡

6 遺跡の年代 六～一九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

また、城下町の時期は三重の堀で町を囲む一六世紀後半を境に前期と後期に区分される。

清洲城下町遺跡の調査は一九八二年の名古屋環状二号線建設に伴う発掘調査から始まり、一九八八・九年度は五条川河川改修、及び県道新川清洲線拡幅に伴う発掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代から江戸時代までの各時期の遺構・遺物が検出されたが、木簡類は、全部で四つの調査区のうち、清須城下町に関連する時期の遺構のみから出土した。

今回、木簡類が出土した遺構は、幅約四mの規模を持つ溝、及び性格不明の滞水状態を示す遺構である。幅四mの溝は有力家臣が居住した屋敷を囲むものと考えられ、幅一〇m以上の溝で区画された、一辺が一〇〇m以上の規模を持つ居館の南に展開する。城下町後期まで継続するものもあるが、いずれも城下町前期に設けられた溝である。以下にそれぞれの遺構の概要を説明する。

六三E区SD〇一(SD一三六) 城下町前期の最も古い段階に位置付けられるL字に屈曲する溝で、南東部に土橋を有する。この中に、土師器の皿が数百枚一括投棄されていた。ここから木簡(1)が出土した。

六三K区SD〇一(SD一一一) 前期から後期まで継続する溝で、前期では屋敷地を囲む溝、後期では地割を画して排水路として利用された溝である。人形の頭部や「正眼寺」などと刻書された硯が出

土している。ここから木簡(2)が出土した。

六三K区SD〇二(SD一一〇) 城下町前期の溝で、SD一一一と並行して走り、その間は道路を形成する。木簡(3)が出土した。

八九F区SX〇一 城下町前期と考えられる窪地で、滞水状況を示す粘土が堆積していた。木簡(4)(5)が出土した。

八九G区SK〇一 調査区が狭小であったため遺構の全容は不明であるが、滞水状況を示す灰色粘土が堆積し、溝か池があった可能性がある。上層には城下町後期の焼土・炭化物の堆積がみられる。遺構の位置はSD一三六で囲まれた屋敷地の南東に位置し、中掘に接する。この中から多量の木簡類が出土した。木簡(6)(7)はその一部である。

8 木簡の积文・内容

(1)  [鴨カ]

・ ]

(2) 「御ちや三×

(3) 「南無妙法蓮華経  のため」

(4) ・  口口 口口

・  南无×

62×(24)×3 081

(127)×(18)×1 061

222×25×3 061

(243)×33×1 061

(5) 「是人心意」
徳力は×
(315)×37×1 059

(6) 「華光仏住世寿十二小劫其国人民衆寿命八小劫」
(340)×37×1 059

(7) 「亦無擯出安住忍故智者如是善修其心 五之十×」
(323)×37×1 059

(1)の裏面は「五」あるいは「九」と読めるが、表裏とも意味は不明である。(2)は他の板材と合わせて容器を作ったと考えられ、墨書はその内容物「お茶」を記したものかもしれない。(3)(4)は共に板塔婆である。(3)は墨書自体は残存しないが、墨書の痕跡から判読した。(4)は表面に五輪塔の大日真言に阿弥陀三尊の種子を加え、裏面にも三字分の種子がある。(5)は『法華経』普賢菩薩勸発品第二十八の経文の一部を書写した柿経である。

八九G区SK〇一から出土した木簡類は全て柿経である。頭部を主頭状にした薄板に『法華経』一部八巻を分割して書写したもので、二〇〇点以上が出土した。今回出土した柿経は出土状況から二〇枚を一束としていたと推定され、いずれも片面にのみ経文を記している。(6)(7)はその一例で、(6)は譬喩品第三の偈頌の一部である。また、(7)は安樂行品第十四の経文の一部で、下端部の余白には巻束番号と考えられる墨書がある。柿経の書写はその書体から一束単位で複数の手によって行われており、多人数によって一斉に写経が実施され、

一括して投げ入れられたものであろう。

なお、(1)~(3)の釈読については奈良国立文化財研究所綾村宏氏の御教示を得た。

9 関係文献

勸愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和63年度』(一九八九年)

同『年報 平成元年度』(一九九〇年)

同『清洲城下町遺跡』(一九九〇年)

同『埋蔵文化財 愛知21』(一九九〇年)

(鈴木正貴)



(近江八幡)

滋賀・西河原森ノ内遺跡
にしがわらもりうち

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字西河原
- 2 調査期間 一九八九年(平一)四月〜八月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 辻 広志
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期〜江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

西河原森ノ内遺跡は、琵琶湖が最も幅を狭める堅田―木浜間の東岸、旧野洲川北流右岸下流域の緩かに傾斜する沖積地の中央にあつ

て、現況では北側の最も近い湖岸まで約3km、南側の三上山山麓を通過する東山道や野洲郡衙推定地(和田・小篠原遺跡)まで約4kmの地点に位置する。
木簡は第五次調査で九点、第七次調査で一点出土した。第五次調査は、一九八四・

八五年度に四点の木簡が出土した七世紀〜九世紀の官衙状遺構群の南東部で実施し、第七次調査はその南東約30mの隣接地で実施した。このうち第七次調査の木簡(14号)は、平安時代前期の包含層より出土したもので、本来大型の木簡の一部分と思われるものであったが、極めて損傷がひどく判読はできなかった。このため、第五次調査の木簡及び遺構の概要を中心に報告することとする。

調査地を含む官衙状遺構群のかつての立地は、周辺の微地形分類図によると、野洲川が作った北東方向の埋没微高地の西側先端部に近い所にあつて、西岸には同時期の木簡を出す光相寺遺跡とも繋がる埋没旧河道が接し、北側には大きく湾入する湖もしくは旧内湖と考えられる後背湿地が広がり、これが琵琶湖へも通じていることから、遺跡は、入江状の「浦」に面した野洲川の一支流の河口部近くに所在した遺跡であつたと復元できそうである。また、官衙状遺構群は、埋没微高地の高所ではなく、むしろ周辺の水田跡よりも低く増水の際には水没の危険性さえある埋没旧河道に近い低地に位置していることから、湖と河川による水上交通を強く意識した実務的な施設ではなかつたかと推測される。

調査は、官衙状遺構群(二町四方程度と推定)の南東部の一角にあたる九一八㎡を対象として行った。七世紀後半から一六世紀までの五遺構面があり、合計三〇〇二㎡に及ぶ。

第一遺構面は、中世〜一六世紀の水田跡で、用水路と水田耕作に

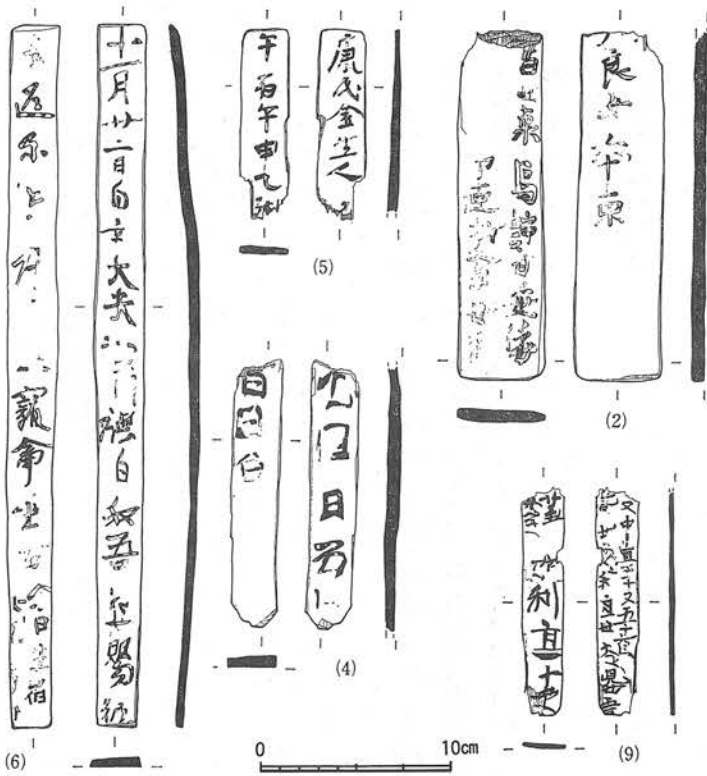
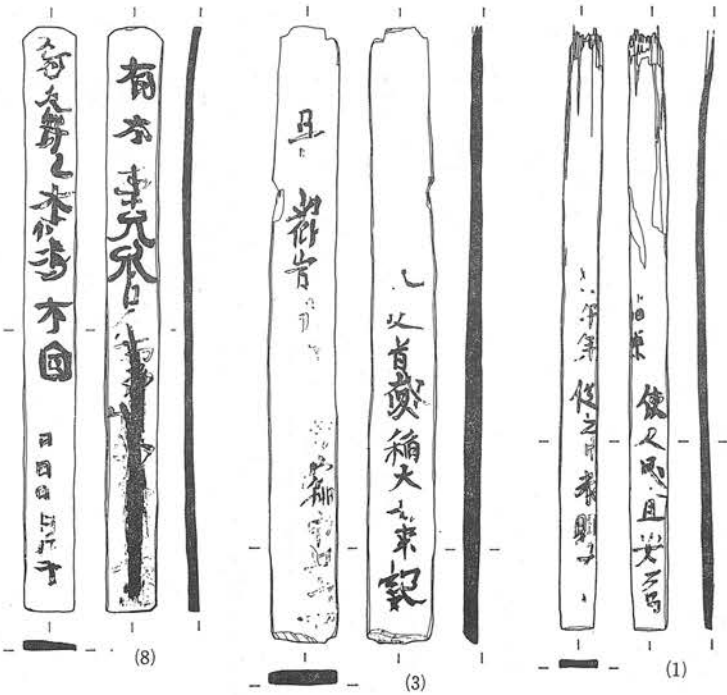
関わる素掘溝が多数検出された。

第二遺構面は、八世紀後半～九世紀末の最も新しい官衙状遺構群で、掘立柱建物一〇棟以上、掘立柱塀(柵)五条などがある。このうち建物は、九世紀中頃までのものが、前代までの建物軸を踏襲し一定の企画性がみられるのに対し、これ以降のものは小規模で方位が東に振れるものが多く、同じ性格を保つものであるのかは少からず問題が残るものであった。また南北方向の塀(柵)二条は、官衙状遺構群の東を限る施設の一つと考えられた。

第三～五遺構面では、南北方向の溝の両側に土塁状の畦をもつ東限の溝跡を確認し、東側に水田跡を、西側に三面の官衙状遺構群を検出した。これらの遺構検出層や間層(包含層)には、数十cmもの厚い粃殻(少量の稲藁と雑穀を含む)の堆積がみられ、木簡を始め多量の遺物が出土した。この粃殻層は、各遺構面共にほぼ同じ位置と規模を踏襲しており、一棟の吹き抜けの作業場的な掘立柱建物を中心に分布していることから、この建物において穎稻を脱穀・脱稈した後に積まれていた粃殻が、冠水のために全面に広がったものと思われる。各遺構面のおよその年代は、第三遺構面が八世紀初～八世紀中頃、第四遺構面が七世紀末～八世紀初、第五遺構面が七世紀後半～七世紀末で、各遺構面より三～五棟の掘立柱建物などを検出した。なお、官衙状遺構群建設以前の土地利用は、東限の溝跡下より同一方向の用水路と畦がみられたり、第五遺構面下層の北側より水田耕

作を示す畝状の遺構が検出されるなど、周辺と同じように水田として利用されていたようである。未だ遺構群の中央部や旧河道の隣接地を調査してはいないため断言できないものの、この遺構群は、七世紀後半のある時期に水田域の一角をそのまま使用して突如建設をみたものと思われる。

遺物は、第三～五遺構面の粃殻層を中心に出土した。多量の土器と共に遺存状態の良い木製品がある。農具には、鋤の身・柄、鍬の身・柄、鎌の柄、馬鍬の歯、横槌、唐臼の杵、堅杵、木錘、田下駄、稲櫛、蓆・俵編機部材、木針などが、紡織具には、糸巻、紡輪、織機部材が、馬具類には、鞍、壺籠、縦櫛が、漁撈具には、櫂、浮子、土錘が、武器には、鉄鍬が、服飾具には、横櫛、下駄が、食器・容器類には、土器の他に木製の皿、盆、鉢、碗、長方形槽、円形曲物、楕円形曲物、曲物杓、蓋板などが、食事具には、杓子、箸が、祭祀具には、斎串、陽物形、刀子形などが、遊戯具には、琴、琴柱が、文房具には、刀子の柄、円面硯が、その他に火鑽板、燈台、各種の建築部材、鉄釘、鞆の羽口、鉄滓などがある。また、墨書土器は、第二・三遺構面包含層より「神」「神主」が、他に欠損によって意味不明なものなど、約三〇点が出土している。木簡は、第三遺構面包含層より(1)(2)が、第四遺構面包含層より(3)～(7)が、作業場的な建物の雨落溝(溝五三〇二)より(8)(9)が出土した。





(近江八幡)

木部遺跡は、琵琶湖の東南部、野洲川下流の沖積平野に立地している。遺跡の範囲は、東西二〇〇m、南北一km余りの微高地上にあり、標高八七m前後を測る。木部遺跡の調査は、県道野洲中主線の敷設に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、平安時代後期の遺構が延長約二〇〇mに亘って検出できた。遺構は、掘立柱建物、溝、井戸

滋賀・木部遺跡

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字木部
- 2 調査期間 一九八九年(平一)四月～七月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 徳網克己
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

などである。

木簡が出土したのは、長径四m、短径三m、深さ一・三mの楕円形をした素掘りの井戸からである。井戸内からの遺物は、黒色土器碗、土師器皿、灰釉陶器、緑釉陶器、土錘等コンテナにして二箱分である。墨書土器二点は、黒色土器碗の底部に「虫生宅」とあり、木部遺跡の東側の地名「虫生」を記したものである。木簡の年代は、出土した土器類の型式から一一世紀後半のものと考えられる。

8 木簡の积文・内容

(1) 「固物」

(806)×38×10 019

木簡は、下端部を欠くが長大なもので、細板の頭部を圭頭状に作り、上寄りに墨書する。物忌札として使用された後、井戸内に投棄されたものと思われる。物忌札の例としては、『木簡研究』八号に平安京左京六条一坊八町の報告などがある。

(徳網克己)



木簡上端部

滋賀・虫生遺跡

むしゅう

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字虫生
- 2 調査期間 一九八九年(平一)八月～二月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 徳網克己・辻 広志
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

虫生遺跡は、琵琶湖の東岸、野洲川右岸下流域の沖積地にある、南北方向の微高地の北側に位置する。



(近江八幡)

調査は、一九八七年より継続的に行っている、県道野洲中主線の敷設工事に伴うもので、微高地上を横断するかたちで実施した。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期と奈良時代～平安時代の集落跡や旧河道、鎌倉時

代の水田跡や畠跡などを検出した。

木簡は、微高地上の最も高所にある集落跡から東へやや下った、水田跡であったことを示す土壌層下の浅い溝(幅二〇cm、深さ一五cm)より発見された。この溝の中や付近からは、少量ではあるが奈良時代の須恵器甕片や坏片が出土しており、この溝の南側にある現在の虫生集落の微高地上にこの時期の遺構の存在が予想される。また、この溝は道路幅の調査であるため正確ではないが、現況の条里型地割の方向にはほぼ等しいものの、その位置が異なっており、木簡の年代と共に興味深い。

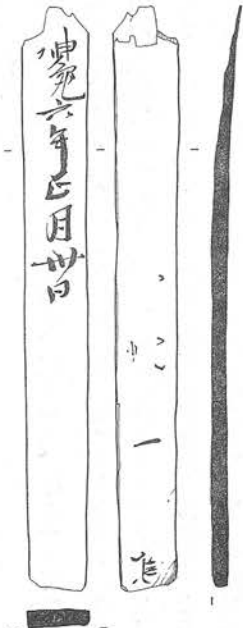
- 8 木簡の积文・内容

(1) 

・神亀六年正月卅日

(267)×30×8 019

木簡は、長方形材の上端を欠く。墨書は、表裏に見られるが、裏面と考えられる「神亀六年」(七二九)は明瞭である。(辻 広志)



滋賀・筑摩^{ちくまつくた}佃遺跡



(彦根東部)

- 1 所在地 滋賀県坂田郡米原町朝妻筑摩
- 2 調査期間 一九八九年(平一)七月～十二月
- 3 発掘機関 米原町教育委員会
- 4 調査担当者 中井 均
- 5 遺跡の種類 集落跡・包蔵地
- 6 遺跡の年代 縄文時代～奈良時代
- 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

筑摩佃遺跡は、天野川の南岸平野部に位置している。遺跡周辺は旧近江国坂田郡朝妻郷に属していたところである。遺跡の東側には

天野川の旧自然堤防上に上多良、中多良、下多良の集落が立地している。遺跡の地目は水田で、現地表面の標高は八七・五m前後を測る。さらに遺跡の西方約1kmには琵琶湖が望まれる。筑摩佃遺跡の発掘調査は、国道八号線バイパスの建設

に伴うもので、米原町教育委員会が一九八九年度に実施したものである。

調査の結果、縄文時代中期の自然流路や土坑、弥生時代中期の人工的な大溝や土坑群等の遺構が検出された。さらにこれら遺構面上層に多量の遺物を含む包含層が二層堆積していた。上層の包含層は現地表面下1m付近に四〇cmの厚さで堆積しており、土質は琵琶湖周辺の遺跡に多く認められる植物の腐蝕土(いわゆるスクモ層)で、包含されていた遺物は縄文時代早期から奈良時代に至るものであった。下層の包含層はこのスクモ層の下に四〇cmほどの厚さで堆積しており、土質は礫まじりの粘土で、遺物は縄文時代早期から古墳時代後期に至るものであった。

今回報告する二点の木筒はこの上層の包含層から出土したもので、包含層中出土遺物の最下限、奈良時代のもものと共存すると考えられる。上層包含層では木筒以外に、斎串が六〇点以上、直径1mを測る楕円形の曲物二点、建築部材などの木製品や、稲束などが良好な状態で出土している。

8 木筒の積文・内容



(側面) (319)×26×19 061

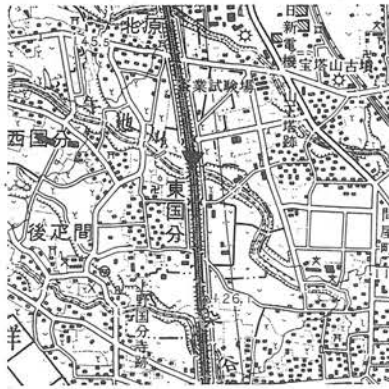
(1)は本来、木槌等の柄であったと推定され、断面が上端部で長方形となり、下端部に向うにしたがって円形となる。上端部には粗い削り込みが表裏両面より施され、先端に向って尖り、下端部はまるくおさめられている。両端部に少し焼けた痕跡が認められる。文字は三面に記されており、達筆である。裏面の文字は中央の二文字が表面と同方向である以外は、すべて下端部から上端部に向って記されている。この表面と同方向で記された二文字は異筆である。左側面に記された文字も裏面同様、下端部から上端部に向って記されている。内容としては同じ文字が連書されており、おそらく習書木簡と見られる。なお「得」「是」「衆」などの文字が目立つことから、習書の手本として仏典を用いたのではないかと考えられる。

もう一点は〇三二型式の木簡の形態を有する(0.1×0.3)。表裏両面に草書状の墨痕は認められるが、おそらく文字にはならない。用途は不明であるが、筆ならしに用いたものではないかと考えられる。

このような二点の木簡が出土した筑摩佃遺跡ではあるが、今回の調査では縄文・弥生時代の遺構が検出されただけで、木簡の時期に相当する奈良時代の遺構は検出されなかった。このため遺跡の性格については言及できないが、出土した包含層が湖辺の植物腐蝕土であったことから、奈良時代頃は周辺が低湿地であり、木簡も流れて来たものと考えられる。

なお周辺に目を向けると、南方三〇〇mに位置する下定使遺跡^{しもじょうし}では、奈良時代の掘立柱建物群が検出され、「飯」「穴太口」「富」などの墨書土器や円面硯、木履、下駄などの木製品が出土している。また筑摩佃遺跡の東に隣接する蘭華寺遺跡からは奈良時代の布目瓦や須恵器が出土している。さらに南西一kmの地点に位置する筑摩湖岸遺跡は、宮内省大膳職(後に内膳司へ移管)に所属する筑摩御厨跡に比定されており、墨書土器、緑釉、風字硯や刀子、神功開宝などが出土している。この筑摩御厨については、平安時代に在地豪族の息長氏が御厨長となることが知られている。当時低湿地であった筑摩佃遺跡周辺には、御厨に関連する施設や、そこに仕出する官人・在地豪族の居宅などが点在していた可能性を含め、今後の検討に待ちたい。

(中井 均)



(前橋)

国分境遺跡は、榛名山麓に源を発する牛池川と八幡川とにはさまれた標高約一三〇mの洪積台地(前橋台地)上に位置する。南側の牛池川部分には三段の段丘が存在し、上位面は集落として、中位面は広場的な機能を有する空間として、下位面は洗い場として、それぞれの段丘面が利用されていたと考えられ

群馬・国分境遺跡

- 1 所在地 群馬県群馬郡群馬町大字北原字国分境
- 2 調査期間 第三次調査 一九八三年(昭58) 二月～一九八四年三月

3 発掘機関 群馬県埋蔵文化財調査事業団

4 調査担当者 真下高幸・小野和之・谷藤保彦・山口逸弘

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 古墳時代後期～平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

さらに集落と洗い場との間には道が存在した痕跡が認められる。本遺跡の東には七世紀後半に建立され一世紀まで存続した山王廃寺があり、また本遺跡のある台地の北側には六世紀代の水田遺構と八世紀後半～一〇世紀前半の集落跡が検出された北原遺跡が存在している。

また八幡川をはさんだ北側部分には七世紀～一世紀の集落である下東西遺跡が、同じく川をはさんだ南側一帯には上野国分僧寺・尼寺、及び奈良・平安時代を主体とする大集落の国分僧寺・尼寺中間地域遺跡が位置している。さらにそれらの南東方向には上野国府跡が存在するが、その範囲は未確定である。

このように本遺跡に隣接する地域には、山王廃寺、推定国府関連遺跡群、国分二寺を含め、特記すべき遺跡が多数存在しており、この一帯が古代上野国の中心地域であったと考えられる。

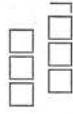
本遺跡の調査は、関越自動車道(新潟線)建設に伴う事前調査であり、検出された遺構は、古墳時代から平安時代にかけての堅穴住居一六八軒、掘立柱建物五棟、井戸二基、溝二条、地下式土壙一基、土坑多数、旧河道一本等である。出土した遺物の大半は土師器・須恵器であるが、緑釉陶器、黒笹一四～丸石二段階の灰釉陶器、墨画土器、墨書土器、鉄器、櫛・曲物などの木製品、鍬や鋤などの木器など特記される資料も存在する。

木簡は、現在の牛池川に接する形で痕跡が認められる旧河道中か

ら一点出土した。この旧河道に接した形で洗い場が存在し、その周辺からは多数の土師器・須恵器とともに木器・木製品、それに自然木が出土している。この河道の存続時期は榛名山二ツ岳火山灰Hr—FA（六世紀前半）降下以後から浅間山火山灰As—B（二世紀初頭）降下以前の約六〇〇年間であり、As—B降下時にはすでに河川としての機能が停止し、地形もほぼ平らな状態になっていたと考えられる。

8 木筒の積文・内容

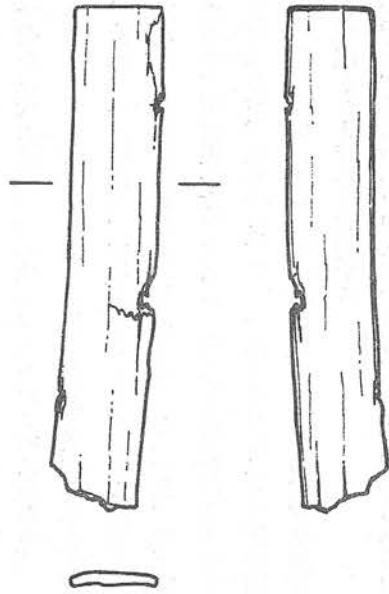
(1)



(167) × 28 × 4 06g

上端部および両側面は原形を留めるが下端部は欠損している。現状で二行・六文字分の墨痕が確認できるが判読は不可能であり、木筒の性格・用途・機能などは明かにしがたい。伴出遺物からみて七世紀後半〜八世紀前半頃のものと考えられる。

なお、本木筒は形状面において、①極めて入念に整形されていること、②両側面の加工が一定であり、かつ面取り加工が施されていること、断面が扁平な蒲鉾状を呈していること、③端部から約三・三cm（二寸一分）のところを切り込みが施されていること、などの特徴がみられることから定木と考えられる。それも切り込みの位置が端部から約一寸一分であるところからみて写経用の定木であろう。それ



を二次的に木筒に転用したものとみられる。類例には石川県金沢市所在の山岳寺院跡である三小牛ハバ遺跡から出土のものがある（『木筒研究』一一号）。本木筒を写経用定木と考えるならば、本遺跡と、隣接する山王廃寺や上野国分二寺との関係が重要視されてくることになる。

本木筒については国立歴史民俗博物館平川南氏の御教示を得た。

9 関係文献

（勸）群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』三（一九八四年）

同『国分境遺跡』（一九九〇年）

（麻生敏隆・高島英之）



(若松)

調査は、河川改良工事に伴う発掘調査で、福島県か

福島・門田条里制跡

もんでん

- 1 所在地 福島県会津若松市門田町
- 2 調査期間 一九八九年(平一)六月～二月
- 3 発掘機関 会津若松市教育委員会
- 4 調査担当者 平野幸伸
- 5 遺跡の種類 条里跡
- 6 遺跡の年代 弥生中期末～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

門田条里制跡は、会津若松市街地の南方約3kmに広がる約一三〇haの遺跡である。本遺跡は、会津盆地東南隅から北流する阿賀川の

東岸に位置し、遺跡東側の山地より流れ出る小河川が形成した沖積平地上に存在する。「門田」の名は、荘園名として「実相寺文書」中に見られるのが、その初見であるとされる。

らの委託により、会津若松市教育委員会が、一九八八年度に試掘調査、翌一九八九年度に発掘調査を実施した。

調査地点は遺跡の東北隅で、南から北へ緩やかに傾斜しており、遺構・遺物の検出は低地である北側に集中する傾向が認められた。条里遺構と断定できるものは検出できなかったが、それぞれが交差・接続する小溝をもつ二条の溝跡のほか、四五基の土坑と小土坑を検出した。

出土した遺物は、コンテナ四五箱分で、その内容は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、木製品等であるが、量的に最も多いのは弥生土器である。また、石器も、この弥生土器に伴うと思われるが、総数九五点の内に三六点の打製石斧(石鏃)の製品・未成品が含まれていることも注目すべきものと思われる。

須恵器は八～一〇世紀に属するもので、点数は二四点と少ないものの、一・二点に墨書があり、そのうち四点には「奎」という文字が墨書されている。

今回の調査地点は低湿地にあるため、木簡をはじめ、人形、二種類の田下駄などの木製品が良好な保存状態で出土している。

これらの木製品のうち、木簡は、SD〇二と呼んでいる溝から出土し、人形はSD〇二とSD〇二一と呼んでいる小溝が交差する付近から、まとまった状態で出土している。また、二種類の田下駄のうちの「大足」とよばれるタイプのものは、SD〇三の堆積土中

から左右が重なった状態で、「なんば」とよばれるタイプのものは、S D O三に接続するS D O三―四とよばれる小溝から右足側が割れて裏返った状態で出土している。

8 木簡の积文・内容

(1) □□税長等依法□物填進了く 寛×

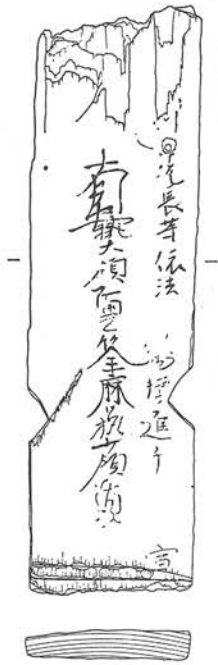
『有安』擬大領□□『筈麻呂』擬少領□□

(362)×75×12 039

本木簡は、厳密にはS D O二の堆積土中からの出土ではないが、溝の掘り込み面を勘案し、S D O二に伴うものと判断している。

記載内容は、上下両端が欠損しているものの、右行に、税長等が法に依って□物を填進(「補填」)し終えたという記述の後に、数文字分空白を置いて「寛」以下の文字を記載している。「寛」は年紀と考えられ、「寛平」(八八九〜八九八年)にあたると思われる。

左行は、「擬大領」「擬少領」の職名と、別筆で「有安」「筈麻呂」



木簡実測図

という署名がなされている。

木簡の性格を考えるうえで重要なのは、長さは不明であるが、幅七・五cm、厚さ一・二cmという非常に大型な木簡であり、裏面は調整が粗く、墨痕が全くないことである。

結局のところ、本木簡は、正倉に納められた官物の不足分を国司・郡司・税長などの役人が補填し、署名したうえで正倉に掲示した「倉札」ではないかと推測される。

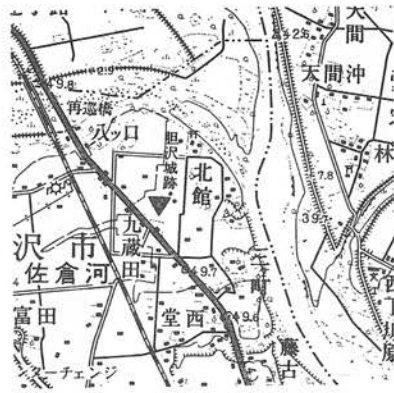
今回の調査において、本遺跡は条里遺構だけでなく、弥生時代中期以降の水田遺構が存在する可能性が大きくなった。また、木簡や墨書須恵器の出土から、官衙的性格の遺構の存在が推定されるが、会津郡衙の所在地は、本遺跡北方約九kmの河沼郡河東町郡山に比定されており、本遺跡付近には、郡内に分置された正倉等の遺構が存在するのではないかと思われる。

なお、木簡の积文・内容については、国立歴史民俗博物館の平川南氏の御教示を得た。

9 関係文献

- 会津若松史出版委員会『会津若松史 第八卷 史料編Ⅱ』(一九六七年)
 会津若松市教育委員会『門田条里制跡試掘調査報告書』(一九八九年)

(平野幸伸)



(北 上)

胆沢城跡は、水沢市街地の北東約4km、北上川と胆沢川の合流地南西岸に位置している。これまでの発掘調査により、方約六七五mの築地と内外溝により区画される外郭線、その中央南寄りに、方約九〇mの政庁跡が確認されている。

第五九次発掘調査は、掘立柱列が区画する政庁内西北隅地区を対象に実施した。政庁跡の構造については、既に、正殿、東脇殿、南門、

岩手・胆沢城跡

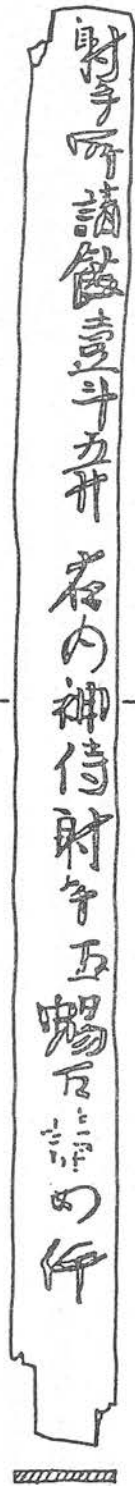
- 1 所在地 岩手県水沢市佐倉河字波田ほか
- 2 調査期間 一九八九年(平一)六月～八月
- 3 発掘機関 水沢市教育委員会
- 4 調査担当者 佐久間 賢
- 5 遺跡の種類 城柵官衙跡
- 6 遺跡の年代 九～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

胆沢城跡は、水沢市街地の北東約4km、北上川と胆沢川の合流地南西岸に位置している。これまでの発掘調査により、方約六七五m

東門、北辺建物が検出され、全体で六期の遺構変遷が確認されている。今回政庁区画北西隅の確認と、正殿北西地区での建物跡の有無の確認を目的として調査が実施された。

調査の結果、北辺区画の掘立柱列(三期重複)とその内外の溝、西北建物にあたる掘立柱建物三棟以上、その他土坑、小柱穴などが発見された。西北建物の最も古いSB二〇〇一は南北三柱間(約六m)、東西五柱間(約一五m)。二期目の建物SB二〇〇二は、梁行二柱間(約四m)、桁行二柱間(約四m)以上の南北棟で、東に一柱間(約二・四m)の廂状施設が付く構造と解されるが、南端が調査区外にあり詳細を確定出来ない。三期目の建物SB二〇〇三は、東西三柱間(約六m)、南北二柱間以上の建物である。なお、建物SB二〇〇一と建物SB二〇〇二は、その変遷過程に土坑SK二〇〇八が存在している。また、建物SB二〇〇二と建物SB二〇〇三は重複する位置に柱列が存在するが、明確な前後関係を把握出来ない。

木簡は、北辺区画内溝から二点出土している。これらの木簡は、深さ〇・五m前後の溝底に近い層中で、木片や用途不明木製品とともに発見された。溝の状況は、上部堆積土に一〇世紀前半の中葉頃に降下したと考えられる灰白色火山灰が積もり、木簡投棄の下限が一〇世紀前半にあることを示す。また、木簡伴出遺物は、須恵系土器を主体に瓦を含むものであり、九世紀末を上限とする。したがって、この木簡の投棄年代は九世紀末から一〇世紀前半の中葉と判断



される。

木簡が投棄された時期の政庁および周辺官衙の状況は、政庁区画、主要殿舎が機能し、特に、昭和六一年度第五二次調査検出の府庁厨屋、昭和六三年度第五四次調査検出の中郭南門が存在している。

8 木簡の积文・内容

(1) 「射手所請飯斗五升

右内神侍射手^[巫] ^[請如件]
場万呂^[] ^[] ^[] ^[]

310×21×2 011

9 関係文献

水沢市教育委員会『胆沢城跡平成元年度発掘調査概報』(一九九〇年)

(佐久間 賢)



(秋田)

土塀が二時期、布掘り溝を

の囲繞施設がある。
(2) 外郭は瓦葺きの築地郭と東西九四m、南北七七mの長方形の政庁域の二重

まともると以下のようなことが判明している。

(1) 東西五五〇m、南北

五五〇mの不整多角形の外郭と東西九四m、南北七七

mの長方形の政庁域の二重

の囲繞施設がある。
(2) 外郭は瓦葺きの築地

秋田・秋田城跡

- 1 所在地 秋田市寺内
- 2 調査期間 第五四次調査 一九八九年(平1)四月～十二月
- 3 発掘機関 秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所
- 4 調査担当者 小松正夫・日野 久・松下秀博・西谷 隆
- 5 遺跡の種類 城柵官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

秋田城跡は秋田市の中央部西端、日本海に面した標高約四〇mの高清水丘陵上にある国指定の史跡である。これまでの調査の結果を

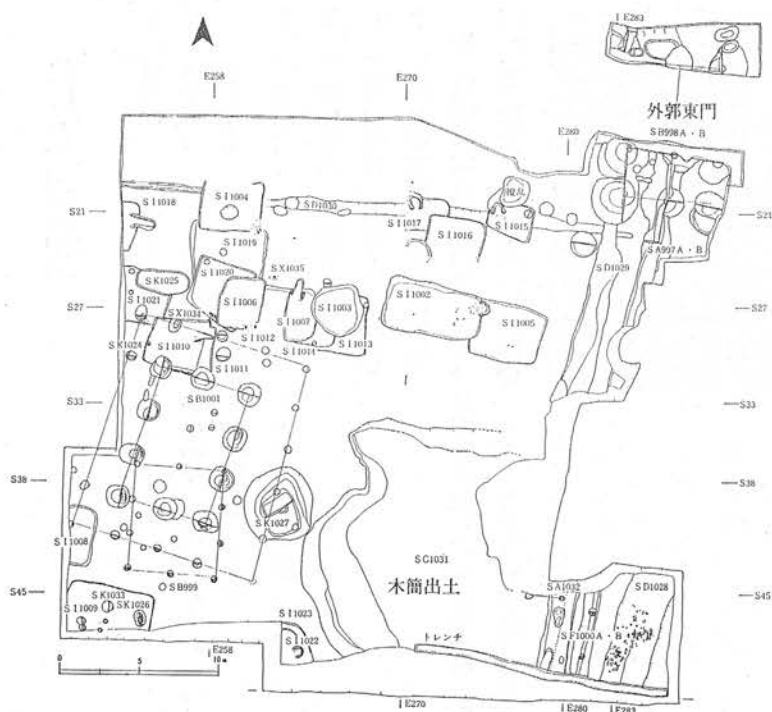
伴う材木塀が二時期の計四時期の変遷があり、政庁域も築地土塀が二時期、掘立柱塀が三時期、布掘り溝を伴う材木塀の時期と区画施設に変遷がある。

(3) 政庁正殿は六期の変遷があるが、桁行五間、梁間二間、南面廂を基本とし、最後の時期を除き、いずれも掘立柱の構造である。四期目の正殿は白壁で大火災により焼失したことが判明している。

(4) 東外郭外の鶉ノ木地区には政庁正殿にも匹敵する大規模な建物群があり、井戸からは天平六年・天平勝宝四年・同五年の紀年のある木簡が出土し、天平五年(七三三)の『統日本紀』にみえる出羽柵の秋田村高清水岡への移遷を裏付けた。

第五四次調査はこのような調査結果のもと、これまで不明であった外郭東門を検出することを目的に外郭推定線と政庁東門の軸線の東延長線が交差する地点を対象に実施した。検出した遺構は桁行三間、梁間二間の掘立柱式の外郭東門、築地土塀(二時期)、材木塀(二時期)、掘立柱建物(二棟)、竪穴住居(二棟)、溝状遺構、湿地などである。出土遺物としては、多量の瓦、須恵器、土師器の他に、六〇点以上の墨書土器、四点の漆紙文書、二〇〇点以上の木簡、木製品(斎串、刺串、絵馬、舟形、琴柱、曲物、挽物皿、碗、漆塗り大皿、篋状の編物、檜扇、下駄、横槌、鋤、鎌)などがある。木簡、木製品は外郭東門の南、湿地SG一〇三二のスクモ層からまとも出土した。スクモ層は外郭築地土塀Ⅱ期の存続期間内に堆積し、靱殻や加

工材の削屑が多量に混入しており、人為的に廃棄された植物質のものがスクモ化したものと判断された。湿地は外郭Ⅰ期の築地土塀構築に伴う土取り穴に雨水と土砂が溜り形成されたものと考えられ、



第54次調査検出遺構図

外郭Ⅲ期材木塀構築時とⅣ期以降のある時期に整地がなされている。

出土した墨書土器には「門」「門」「序」「客厨」「厨」「火」「鎮」「鎮兵」「権目」「佐」「官」「政」「田川」「河郡」「秋」と判読できるものがある。

漆紙文書は四点出土しているが解読の終わった二点について紹介したい。

漆紙文書(1)

(釈文)

口 ×

口 陸 ×

口 伍小子

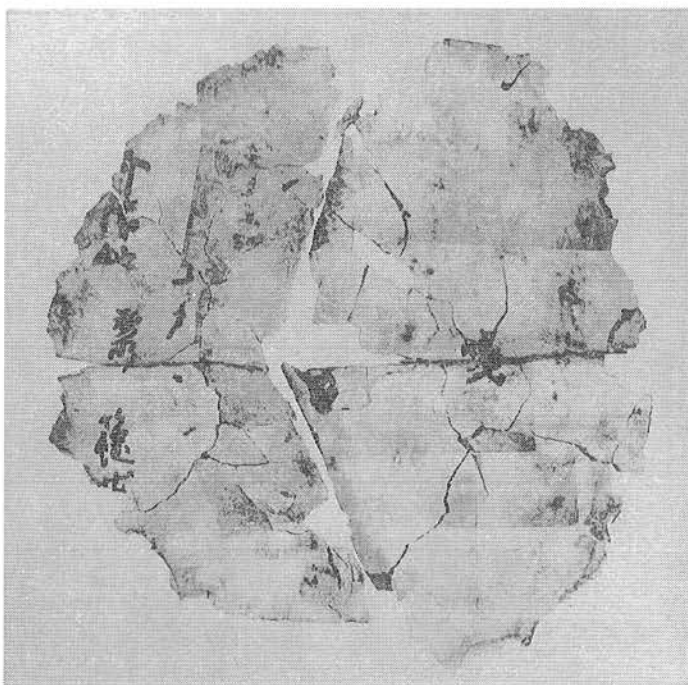
口 貳年十七

口 壹年十六

五行一七文字が読みとれる。楷書体で数字が大字であり、口数を列記した統計的文書と判断される。小子の内訳「年十七」「年十六」の記載は延喜主計式にみえる大帳式と類似し、小子の計「伍」に対して、その内訳「貳」と「壹」では合わないが、「壹」の右肩に校合と考えられる墨点が二つ存在しており、国府作成の大帳の案文と考えられる。文書の年代は小子が天平宝字元年四月、従前の一六歳から一七歳に延長されたことから、それ以降のものともみることができる。



漆紙文書(2) 表



同裏

漆紙文書(2)

(積文)

(表)

〔謹啓カ〕

勘取釜老口 在南大室者

〔右外カ〕

□□若有忘怠未取者乞可

令早勘取随恩得便付 □□〔国カ〕

□□〔徳カ〕
□□縁謹啓

五月六日卯時自蚌形駅家申 □□〔上カ〕

竹田継 □

(裏)

封

介御館 務所 竹継状

書状がほぼ全紙、帯封の状況が復元できる完全な形態で出土した。直径が約二六cmの円形で「フタ」紙の形状を良く残している。四つ折りの状態で木簡出土のスクモ層下約四〇cmの砂層から出土した。竹田継□が蚌形駅家から秋田城にある介の館の務所宛に出した書状と考えられる。年代的には出土層位から八世紀後半頃と判断される。蚌形駅家は延喜兵部省式諸国駅伝馬条に「蚌方」とみえており、現在の秋田県南部沿岸の象潟にあたる。

8 木簡の積文・内容

(1) 「 V 春米嶋守」

129×21×4 033

(2) 「 V 春米長万呂」

151×21×4 033

(3) 「○三月四日八升×

(127)×(16)×4 081

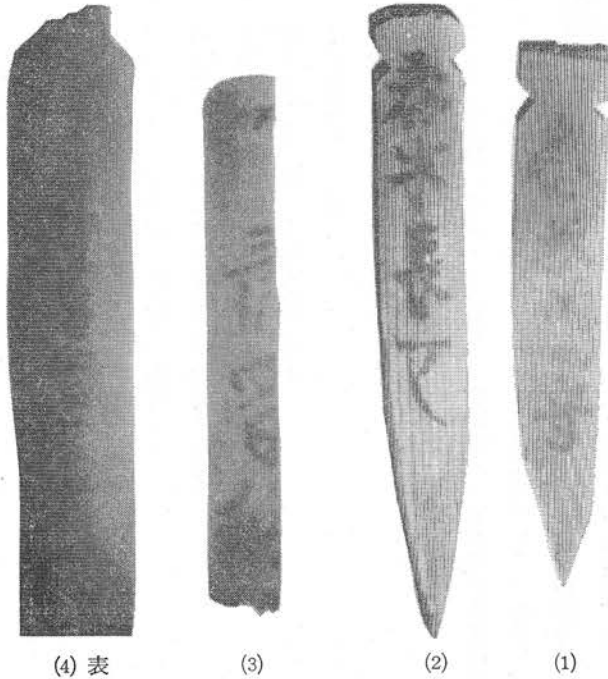
(4) ・ $<$ 延暦十年四月廿一日」

(145)×27×6 032

湿地SG一〇三一のスクモ層からはこの他にも二〇〇点をこす木簡が出土しているが、目下、整理・解読の途上にあり、ここでは比較的墨痕の明瞭な四点に限って紹介する。

(1)、(2)は付札と考えられるが人名のみで他の記載がない。他に、同様な例で「酒見公□□」と見えるものがある。(3)は食料の授受に関わる文書木簡と思われる。下端、右側面を欠損しており、上端には径約三mmの穿孔がある。(4)は延暦一〇年(七九二)の年紀があり、切り込み上部が欠損している。裏面にも墨痕があるものの判読不能である。

この他にも表裏に一〇名程の歴名のあるもの、「上野国」の国名のみえるもの、「食米」「殿門酒」「食料」「主粮」など食料、酒などの授受に関わるもの、習書など多様な内容の木簡があるが、今後報



告の予定である。なお、年紀のあるものとしては他に「延暦十三年」(七九四)の木簡がある。

木簡、漆紙文書の解読に関しては国立歴史民俗博物館平川南氏の御教示によった。

9 関係文献

秋田市教育委員会『平成元年度 秋田城跡発掘調査概報』(一九八九年)

(目野 久)

巻頭言

木簡研究 第九号

田中 稔

一九八六年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 興福寺旧境内 藤原京跡 和田麿寺
 橋寺 曲川遺跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長
 岡京跡(4) 平安京右京三条二坊八町 平安京右京五条一坊三
 町 平安京右京三条二坊八町 平安京右京五条一坊六町 平
 安京右京八条二坊二町 平安京右京八条二坊十二町 伏見城
 跡 大坂城跡 安堂遺跡 津田トッパナ遺跡 萱振A遺跡
 弥布ヶ森遺跡 但馬国府推定地 初田館跡 福田片岡遺跡
 清洲城下町遺跡(1) 清洲城下町遺跡(2) 居倉遺跡 土橋遺跡
 駿府城三の丸跡 東京大学構内遺跡 浜野川遺跡 神照寺坊
 遺跡 浄琳寺遺跡 光相寺遺跡 吉地薬師堂遺跡 胆沢城跡
 根城跡 生石2遺跡 新青渡遺跡 弘田柵跡 田名遺跡 曾
 万布遺跡 辻遺跡 富田川河床遺跡 草戸千軒町遺跡 周防
 国府跡 中島田遺跡 大宰府跡 井相田C遺跡 吉野ヶ里遺跡
 一九七七年以前出土の木簡(九)

平城宮跡(第三二次補足調査)

国語の表記史と森ノ内遺跡木簡

敦煌凌胡際址出土冊書の復原

漆紙文書集成

佐藤宗諱・橋本義則

大庭 脩

稲岡耕二

正倉院木簡の用途——原秀三郎氏の所説に接して——

東野治之

岸俊男会長の思い出

平野邦雄

集報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円



(岡山北部)

岡山・百間川原尾島遺跡
ひゃっけんがわはらおじま

- 1 所在地 岡山市原尾島
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)八月～一九九〇年三月
- 3 発掘機関 岡山県教育委員会(岡山県古代吉備文化財センター)
- 4 調査担当者 平井 勝・岡本寛久・藤田耕平・高田恭一郎・阿部泰久
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代晩期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

百間川原尾島遺跡は岡山市街地の東部、旭川の東岸近くに位置している。弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡としてよく知られているが、『百間川原尾島遺跡2』で報告されたように、中須賀・丸田の両調査区では一二世紀から一六世紀にかけての遺構・遺物が出土していて、中世の集落跡と

しても注目される。

百間川は江戸時代の初め、岡山城下を旭川の洪水から守るために放水路として築堤、掘削された人工河川であるが、一九七四年以来、河川改修工事が続けられ、それに伴う発掘調査も一九七六年以来継続して実施されている。今回の調査は中須賀・丸田両調査区の北に隣接して二〇m幅の調査区を設けて実施した。

調査の結果、集落の東端を画するとみられる幅四mの大溝と屋敷地を区画する小溝、それに掘立柱建物・柵などが検出され、百間川原尾島遺跡の中世集落の様相がいくらか捉えられるようになった。

これらの溝や建物は、いずれも東西ないしは南北方向で整然と配置され、推定条里地割と密接な関係をもつようである。屋敷地の広さは一様ではなく、東西幅で一八m、二〇m、三九mと差がみられる。南北幅は不明だが、三〇mを超えることは確実と推測される。もっとも、屋敷地を区画する溝をまたぐ建物も確認されていることから、屋敷地の区画にはかなり変遷があったものと考えられる。

一つの屋敷地の中には、八・三m×五・七m程度の規模の建物一棟と、これより小規模な建物が一ないし二棟付属して建てられ、井戸を一基伴っている。また、墓壙とみられる長方形の土坑が一、二基存在している。このような屋敷地内での遺構の組み合わせは周辺の百間川米田遺跡でも確認され、中世、とくに室町時代におけるこの地域での一般的なあり方と考えられる。

ここで報告する五点の木簡のうち、呪符木簡の四点は集落の東端を画する溝に接する、もっとも広い屋敷地内で検出された井戸から一括して出土したものであり、他の一点は東端を画する大溝から出土した。ちなみに、この屋敷地の西に隣接する屋敷地内の井戸（井戸—30）からも呪符木簡が一点出土している（『木簡研究』四号参照）。

呪符木簡四点が出土した井戸は素掘りで、検出面で長径三・五m、短径二・六mの楕円形を呈し、深さは二・八mまで確認したが、それより底は湧水が激しく、発掘不能となった。井戸内部の形状は複雑で、断面は階段状になり、底部付近では長径二m、短径一・八mと狭くなっていた。埋土の堆積状態もきわめて複雑で、細かな分層が可能であり、また、薄い炭層や植物質遺体の堆積層などが幾層にも重なり合い、内壁の崩落を示すような層も多くみられた。しかし、大きくまとめれば五層に大別できるようである。最下層は井戸の内壁の崩落によって埋まったものと考えられ、地山と同様の土のプロックが多くみられた。第四層から上は炭や植物遺体などを多く含み、人為的あるいは、周辺からの土砂の自然流入によって埋まったものと推測される。木簡が出土したのは第三層で、同じ層から漆塗り椀や折敷、筵なども同時に出土し、日用品の廃棄場所として利用されたことを示している。第四層の底部付近でも遺物の集中がみられ、下駄や板材、それに蔓状のものを結び目にしたものや、藁状のものを直径八cmの円環状に束ねたものなどが出土した。土器も少量出土

し、土師器、備前焼、青磁（雷文帯）などがある。備前焼の年代は間壁忠彦・間壁葎子両氏編年のⅣ期を示し、この井戸の廃絶が一五世紀後半から一六世紀初頭頃であったと考えられる。

8 木簡の积文・内容

(1) 「〔日カ〕鬼 急々如律令」
161×24×3 011

(2) 「〔日カ〕鬼 急々如律令」
144×25×3 019

(3) 「〔符録〕鬼〔鬼カ〕急々如律令」
142×15×2 081

(4) 「〔符録〕鬼〔鬼カ〕急々如律令」
107×19×2 081

(5) 「〔小カ〕一丈」
123×19×3 059

(1)～(4)が井戸出土の木簡、(5)は大溝出土の木簡である。

(1)～(3)は符録の下に「急々如律令」の呪句を記した呪符で、(4)も符録らしい墨痕が認められる。符録が三種三様であり、それらが一括して出土したことが注目される。形状をみると、(1)が完形で、わずかに丸味をもった頭部から先細りの体部に至り、下端は尖らせることなく、直線的に截断している。(2)の下端も残存していると認められ、(1)と同様の形状が推測される。この形状は先述の原尾島遺跡

井戸―30出土の呪符木簡とほぼ同形であり、この地方での呪符木簡の形状として一般的なものであったことが想定される。

(5)は長方形材の上端の両肩を落として圭頭にしたもので、下端は折損している。記載文字の下二字は「一文」と読めるので、上の文字は物品名の可能性が強い。したがって、この木簡は草戸千軒町遺跡で多数出土しているような付札ではないかと考えられる。

これらの木簡の出土した意味について考えると、呪符木簡では符籙の異なる四点が一括して出土したことが重要である。この時代には各屋敷地に井戸が一基ずつ付属していることから、一つの家で使われていた呪符を一度に投棄したことも考えられ、中世における呪符の盛行の一端が窺える資料といえる。また、付札とおぼしき木簡の出土は原尾島遺跡の性格を考える上で注意される。わずか一点ではあるが、商品流通に関するような資料の出土は市場的な性格を匂わせる。今後の隣接地での調査が注目される。

なお、呪符木簡の釈読にあたっては奈良大学水野正好氏の御教示を得た。

9 関係文献

岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告19』（一九八九年）

岡山県古代吉備文化財センター『所報 吉備』第七号（一九八九年）

（岡本寛久）



(2)

川崎市市民ミュージアム展示図録

『木簡―古代からのメッセージ』

一九九〇年一〇月から一二月にかけて開かれた「木簡」展の図録である。木簡の特別展は初めての試みで、全国から一五〇点をこえる木簡を集めて展示された。図録は展示品を中心とする写真図版と、平野邦雄・鬼頭清明・平川南・鈴木靖民・石井進の各氏による論考を収めた本文編よりなる。

B5判、二〇四頁、頒価一八〇〇円・送料三一〇円

川崎市市民ミュージアム 一九九〇年一〇月刊行

申込先 同ミュージアム TEL 〇四四(七五四)四五〇〇

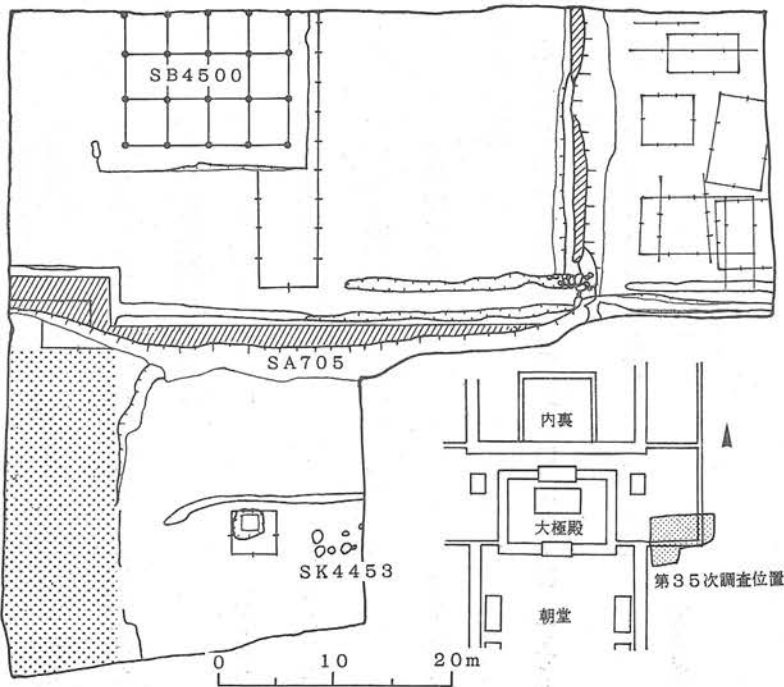
一九七七年以前出土の木簡（一二）

奈良・平城宮跡（第三五次）

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六八年（昭43）一月～一九六九年四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 坪井清足
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査は、いわゆる「第二次朝堂院」の大極殿東外郭大垣の東南隅の部分で行った。検出した主な遺構は、南面築地と東面築地、および外郭大垣内側に礎石建ちの総柱建物SB四五〇〇、外側に掘立柱建物教棟と井戸などである。

南面築地は全長九一m（三三〇尺）あり、その西端で大極殿回廊の東南隅に接続し、東面築地は全長九八・四m（三三三〇尺）で、北は内裏東外郭の築地に接続する。南面築地のほぼ中央には門があり、門



第35次調査遺構図

から北と南に道がのびている。

木簡は南面築地の南にある井戸の周辺に点在する小土坑群SK四四五三およびその上部の堆積土から出土した。点数は合計一四一点である。木簡の年代は、(2)(6)の「天平」、及び(4)の「大養徳国」の表記が『続日本紀』によれば天平九年三月〜同一九年三月に限ってみられることなどから判断して、天平年間を中心とするものと推定できる。

木簡の内容は陰陽寮に関するものがまとまっており、平安宮大内裏図にみえる陰陽寮の位置と、発掘地が相対的に類似することが注目される。

8 木簡の積文・内容

- (1) 「陰陽寮移 大炊寮 給飯捌升 右依」

- ・「例給如件録状故移
年八月カ

從八位下」

419×(35)×5 011

- (2) □陰陽寮解申宿直

- ・『月月天平』(天地逆)

(78)×(6)×3 081

- (3) 「陰陽寮受飯八升カ

- ・

(89)×(9)×2 081

- (4) 大政内礼礼主

- 大養徳国 大

(85)×(34)×6 081

- (5) 廿五日小三卷即本受一卷十日

(115)×(10)×2 081

- (6) ・「近江国乘田佃銭老」

- ・「天平□年」

71×16×3 032

- (7) □石川由恵万呂□

(102)×(23)×7 081

- (8) ・「^{二カ}把 冊□□廿八把二□□」

- ・把伊麻婆礼「婆カ」

(202)×20×3 081

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 一九七〇』

(一九七〇年)

同『平城宮発掘調査出土木簡概報(七)』(一九七〇年)

(寺崎保広)

木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つぎの事業を行う。

- 1 木簡に関する情報の蒐集および整理
- 2 研究集会の開催
- 3 会誌『木簡研究』その他の刊行
- 4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力
- 5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他の前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

- 1 会長一名
- 2 副会長二名
- 3 委員若干名
- 4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもつき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってあて、総会において会計報告を行うものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

彙報

第一一回總會および研究集会

木簡学会第一一回總會と研究集会は一九八九年二月二日、三日の両日にわたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一五〇名の参加者をえて開催された。会場には平城京の二条大路木簡、滋賀県の西河原森ノ内遺跡出土木簡などが展示され、会員の関心をよんだ。

◇二月二日(土)(午後一時—五時)

第一一回總會(議長 鈴木靖氏氏)

最初に平野邦雄会長の挨拶があり、つづいて議長を選出して議事に入った。

会務・編集報告(鬼頭清明委員)

今年度の新入会者は二三名、退会者一名あり、会員数は二五七名となっていること、会員増によって今後の会の運営について再検討の時期にきていること、会誌一一号の編集経過、頒価を前号同様に(三八〇〇円 送料四〇〇円)決定したこと、編集実務の負担が大きいくそのあり方についても検討すべきであることなどが報告された。

会計報告(綾村宏委員)

一九八八年度の収支報告があり、ひきつづいて田中稔監事から山泰孝監事とともに監査を行い、会計の執行が適正に行われていることを確認した旨の報告があった。

一〇周年記念出版について(鬼頭清明委員)

記念出版の『日本古代木簡選』の編集経過説明と、それにとまなう特別予算の執行状況についての報告があった。

木簡データベースについて(田中琢委員)

奈良国立文化財研究所で進めている同データベースの公開体制が整備されてきたので、利用方法等を検討し会員からも意見を求めたい旨の説明があった。

以上の案件に関して、討議が行われ、議案は承認された。

研究集会(司会 和田萃氏)

木簡研究の歩みと課題

佐藤 信氏

西河原森ノ内遺跡の地理的・歴史的環境

辻 広志氏

西河原森ノ内遺跡出土の木簡について

山尾幸久氏

佐藤報告は、木簡研究史をたどりながら、合わせて木簡学会の一〇年を振り返り、さらに今後の研究課題を提示したもので、その内容は『日本古代木簡選』に掲載される。佐藤報告に関連して、平川南・倉住靖彦・東野治之・今泉隆雄の各氏よりコメントがなされた。辻報告は、一九八五年以来七世紀末から八世紀初の木簡が出土し

て注目を集めている西河原森ノ内遺跡について、発掘の概要と遺跡立地の環境についてスライド等を使いながら説明があった。

辻報告にひきつづいて、同遺跡出土の木簡について山尾報告が行われた。その内容は本誌に掲載できた。

◇二月三日(日)(午前九時―午後三時)

研究会(司会 吉田孝氏・鬼頭清明氏・佐藤宗諄氏)

一九八九年出土木簡の概要

森 公章氏

平城京東二坊二条大路出土木簡

渡辺晃宏氏

長岡京左京一条三坊六町・十一町出土の木簡

百瀬正恒氏

森報告は、一九八九年に全国で木簡が出土した三六の遺跡について、木簡出土遺構と木簡の概要を述べたもので、その多くは本誌に掲載できた。

渡辺報告は、長屋王宅推定地の北に接する二条大路と左京二条二坊五坪の発掘成果及び出土木簡の報告であり、いわゆる「二条大路木簡」の内容についての解説が中心となった。参加者の大きな関心を呼び、特に左京二条二坊五坪の性格について議論が集中した。

百瀬報告は、一九八八年に発掘され四〇〇〇点近い木簡が出土した長岡京左京一条三坊六町・十一町の遺構と木簡の概要についてのもので、これも本誌に掲載したので参照されたい。

報告の後、渡辺報告に関連して平城京左京二条二坊三・四・五・六坪にあたるいわゆる「東院南方遺跡」について、その遺跡保存に

万全を期すべき旨の要望書を、木簡学会から関係機関に提出したいという提案が会長から示され、議論が交わされた。おおむね原案が認められ、文案等の修正・提出などについて会長以下委員会に一任されて、閉会した。

委員会報告

◇一九八九年二月二日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究会の運営について検討が行われた。また、「東院南方遺跡」保存に関する委員会提案についても話し合われた。

◇一九九〇年五月一日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八九年度の会計報告、『木簡研究』第一二号の編集計画、大会の日程等について話し合われた。新たに清水みき・土橋誠・鷲森浩幸・鈴木景二の四氏に幹事を委嘱することとなった。また、一〇～十一月に川崎市市民ミュージアムで開催される「木簡展」について、木簡学会が協力すること、あわせて期間中に公開研究会を行うことが提案され、了承された。

◇一九九〇年一〇月二六日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九九〇年度の会計中間報告、『木簡研究』第一二号の編集状況、大会の日程等について検討され、川崎市市民ミュージアムで行われた公開研究会の報告がなされた。

公開研究会

◇一九九〇年一〇月一〇日(水)

於川崎市市民ミュージアム

木簡学会協力の「木簡展」にともない、川崎市市民ミュージアムと共催で公開研究会が「フォーラム古代東国と木簡」と題して開催された。当日は会員及び会員外の参加を得て約三〇〇名の参加者があった。基調報告は次の通りである。

相模の木簡

鈴木靖民氏

下野国府の木簡

加藤友康氏

行田市小敷田遺跡出土の木簡

宮滝交二氏

宮都出土の安房の木簡

佐藤 信氏

上野国分寺の文字瓦

前沢和之氏

石岡市鹿の子C遺跡出土の漆紙文書

平川 南氏

多摩ニュータウン№一〇七遺跡について

竹花宏之氏

一九八九年度大会で決議され、文化庁長官・奈良県知事・奈良市長宛に出した要望書の全文を掲げておく。

平城京出土木簡の保存・公開

及び平城宮東院南方遺跡の保存についての要望書

平城京左京三条二坊の西北四坪については、百貨店建設の事前調査として一九八六年以来、今春まで発掘調査が実施され、大量の長

屋王関係の木簡が出土しました。その結果、同地が長屋王邸と推定されたことは、すでに周知のとおりであります。また、その後の一連の調査結果では、長屋王邸の北方にあたる平城京二条大路の南辺と北辺で長大な土坑が発見され、そこから約五万点の木簡が出土しました。最近の奈良国立文化財研究所の発表では、木簡は、全体の四パーセント程度の解読結果だけでも、天皇に供する贄に関する荷札、聖武天皇の吉野行幸に関する木簡、皇后宮や、皇太夫人宮子、さらには、当時の政界の中枢にあった藤原麻呂(不比等の四男)にかかわる木簡など、天皇家、藤原氏に直接かかわるものや、絵馬、中国風の建物の絵をかいた板など重要な史料であることが判明しました。

これらの木簡の内容は、従来の文献史料からは、まったく想像しえないような情報を多量に含むものであり、天平年間を中心とする奈良時代史全体についての再検討の必要を迫っております。

このようにみますと、先に出土した長屋王家の木簡とならんで、これらの木簡の十分な保存措置と速やかな調査と公開を行いうる組織の整備拡充が望まれます。

それだけではなく、木簡が平城宮東院南方遺跡の南辺で、異常なほど大量に出土を見たことは、同遺跡の性格を究明する手がかりをあたえています。東院南方遺跡は、あたかも平城宮の東南の一面を占めるような位置にあって、その立地からみて平城宮と一体の施設

が営まれていた地域と推定されてきました。今回の多量な木簡の発見は、この推定を強く裏づけたものといえましょう。

木簡学会としては、南に接する長屋王邸跡が破壊されたことについて、痛恨の思いを抱いています。同遺跡が長屋王邸であることが判明した時には、すでに工事が進行しており、保存の手の打ちようがなかったことは悔やんでもあまりあるものがあります。その北に接する平城宮東院南方遺跡とその周辺については、大型の百貨店の進出にともなう現状の変貌はすでに現実のものとなりつつあり、緊急に保存措置が構ぜられるべき地域と考えます。

わたくしたちはこのように検討した結果、左記の二点を関係機関に要望します。

- 一、長屋王家木簡や、今回の二条大路出土木簡の保存、整理、公開の体制を充実させること
- 二、東院南方遺跡の万全の保存措置をはかること

一九八九年二月三日

木簡学会

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 12 1990

CONTENTS

| | | |
|--|--------------------|---|
| Foreword..... | Migaku Tanaka..... | i |
| Wooden Documents Excavated in 1989..... | | 1 |
| Outline | | |
| Explanatory Notes | | |
| Nara Capital Site, Nara Prefecture; Remains in Nara Capital Eastern 4th Ward on 2nd Street, Nara Prefecture; Yakushiji Temple Site, Nara Prefecture; Saidaiji Temple Site, Nara Prefecture; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture; Fujiwara Capital Site, Nara Prefecture; Yamadadera Temple Site, Nara Prefecture; Remains of Uenomiya, Nara Prefecture; Asuka Capital Site, Nara Prefecture; Nagaoka Capital Site (1), Kyōto Prefecture; Nagaoka Capital Site (2), Kyōto Prefecture; Nagaoka Capital Site (3), Kyōto Prefecture; Remains in Kyōto Capital Eastern 3rd Ward on 3rd Street, Kyōto Prefecture; Remains in Kyōto Capital Western Markets, Kyōto Prefecture; Remains in Kyōto Capital Western 1st Ward on 6th Street, Kyōto Prefecture; Remains in Kyōto Capital Western 2nd Ward on 7th Street, Kyōto Prefecture; Remains of Kutami, Kyōto Prefecture; Ōsaka Castle Site (1), Ōsaka Prefecture; Ōsaka Castle Site (2), Ōsaka Prefecture; Ōsaka Castle Site (3), Ōsaka Prefecture; Remains of Kamikiyotaki, Ōsaka Prefecture; Remains of Hikishō, Ōsaka Prefecture; Remains of Uemachi, Ōsaka Prefecture; Remains of Ozone, Ōsaka Prefecture; Remains of Morikitamachi, Hyōgo Prefecture; Remains of Tajima Kokubunji Temple, Hyōgo Prefecture; Remains of Sunairi, Hyōgo | | |

| | |
|---|-------------------------|
| Prefecture; Remains of Shima, Hyōgo Prefecture; Remains of Yamakuni-Gengasaka, Hyōgo Prefecture; Remains of Kamitakino-Miyanomae, Hyōgo Prefecture; Kiyosu Castle Site, Aichi Prefecture; Remains of Kawai, Shizuoka Prefecture; Remains of Tama Newtown, Tōkyo Prefecture; Remains of Nishigawara-Morinouchi, Shiga Prefecture; Remains of Kibe, Shiga Prefecture; Remains of Mushū, Shiga Prefecture; Remains of Chikuma-Tsukuda, Shiga Prefecture; Remains of Kokubuzakai, Gunma Prefecture; Remains of Monden, Fukushima Prefecture; Isawajō Castle Site, Iwate Prefecture; Akitajō Castle Site, Akita Prefecture; Remains of Tuji, Toyama Prefecture; Remains of Teramae, Niigata Prefecture; Remains of Tenjinyama, Tottori Prefecture; Remains of Hyakkengawa-Haraojima, Okayama Prefecture; Remains of Kusadosengenchō, Hiroshima Prefecture; Remains of Suō-Kokufu, Yamaguchi Prefecture | |
| Wooden Documents Excavated before 1977 (12) | 137 |
| Nara Palace Site (35th Excavation) | |
| On the Wooden Documents Excavated in Remains of Morinouchi Yukihiisa Yamao..... | 139 |
| A Study of Ancient District Name through Wooden Documents and Wamyōsho (和名抄) —from the Standpoint of Japanese Language Science— | Rikio Kudo..... 169 |
| A Study of Udoneri (内資人) | Hiroaki Haruna..... 183 |
| Bulletin | |

Published by
JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九九〇年十一月二十日 印刷
一九九〇年十一月二十五日 発行

〒630 奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

簡

学

会

綾村

宏

氣付

会長

平野

邦雄

TEL (094) 341-3931
振替口座 京都 〇一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞

陽

社

TEL (094) 351-1603

ISSN 0912-2060

